田中栄治を語り合う会

日時　令和元年六月十五日（土）

場所　青学会館二階　ミルトス

ご挨拶

田中広太郎（親族代表）

本日は、父を偲ぶ「田中栄治を語り合う会」にご参集賜り、誠にありがとうございます。また、生前は、父に多大なるご厚情を賜り、心より深く感謝申し上げます。

皆様ご存じのとおり、父は、２０１０年１月３日に故郷の山口県萩市で重篤な脳出血により倒れ、以後、９年２ヵ月の間、意識が混濁した状態が続きました。

長期にわたる入院中、私ども親族には信じられないほどの、本当にたくさんの皆様にお見舞いに来ていただき、また、様々な暖かい支援をいただきました。

父がたまに目を開けるときには、声掛けに対してうなづいたり、お見舞いの方を目にして涙を流すこともありましたので、話すことはできなかったものの、皆様の示してくださった暖かなお心遣いをきっと理解できていたものと確信しております。

主治医からは、笑いながら、「こんなにもたくさんの方がお見舞いにお見えになる患者さんは見たことがないです」、「初めてのお見舞い客がお見えになると、『田中さんのお見舞いですか？』とこちらから尋ねるようにしています」などと告げられたこともありました。

また、母や姉夫婦が、遠距離にもかかわらずほぼ毎日のように介護に通う姿を見て、「ここまで献身的に世話をされる患者さんはほとんど見たことがない。通常は、もって３年の状態のところ、９年も生き抜けたのは、皆さんのご支援の結果だとしか思えない。本当に幸せなこの世の去り方だと思います」とも言っていただきました。

何よりも人との交流を愛してやまなかった父が、尊厳をもってこの世を去ることができたこと、また、私ども親族一同が穏やかな気持ちで父の死を受け入れることができたのは、ひとえに、皆様のおかげと感じており、感謝しても感謝しきれない思いであります。

父は、生前、「他の方の葬儀に出席すると、とても辛い気持ちになるので本当は行きたくない」とよく言っておりました。また、「人の葬儀」というものは、その人のために集まる人たちが旧交を温め、亡くなった人の生き方から何かのメッセージを受け止めて、そのメッセージを活かすための場である、と考えていたようです。

こうした故人の意思を尊重しまして、本日は、暖かく、笑いの絶えない会になってほしいと希望しております。

最後に、このような会の開催は、親族のみではとうてい出来ることではありませんでした。ひとえに、準備・調整にお力をいただきました皆様のおかげでございます。

本日お集りの皆様に、親族を代表しまして、そして父に代わりまして、厚く御礼申し上げます。本日は誠にありがとうございました。

令和元年６月１５日

栄ちゃんを偲ぶ（五五年前の出会いからを振り返りて）

筒井　大和（弁理士・大学時代からの友人）

小さい体なのになんて力持ちなのだ、というのが、私が田中栄治さん（栄ちゃん）に初めて会った時の強烈な第一印象でした。五五年前の昭和三九年四月、大学の体育会重量挙げ部の練習場での初めての出会いの時のことです。同年十月に開催された東京オリンピックの強化選手も複数人いる中で、栄ちゃんだけは重量挙げ未経験者の中で唯一のレギュラー扱いでした。

それ以来、お互いが中国地方出身（栄ちゃんは山口県萩市の郊外・私は岡山県の北端の田舎）ということもあってか、意気投合し、両人共にそれぞれの理由で部活動は途中で辞めた後も、栄ちゃんが兄貴、私が弟分という感じの関係で長い付き合いが始まりました。

栄ちゃんは兄貴として、弟分である私のガールフレンド（現在の私の妻）の紹介者でもあり、その縁で、自ら新婚一か月の身で、奥様の田中仙様と共に我々の仲人も務めてくれました。「名より実のある仲人」という気持ちで、新婚一ヶ月の栄ちゃんご夫妻に仲人を頼んだのですが、無茶なお願いを快く引き受けてくれたご夫妻の懐深さには未だに感謝あるのみです。

栄ちゃんは、類稀な才気煥発で、人並み外れた才能と器用さに満ちた人で、想い起せば、年賀状配達などを始め様々なアルバイトに明け暮れながら、いつ勉強したのか、大学在学中に公認会計士補の試験に見事合格したことには、みんな驚きました。

大学卒業後は、トイレやゴミ問題等に取り組み、「金持ちよりも人持ちになりたい」との理想の下に、都市小屋「集」の主催、地域交流センターの創設・運営等、枚挙にいとまが無いくらい幅広く活動されて来ました。

九年前に脳出血で倒れて以来、奥様の献身的な看護もあって、驚異の生命力で頑張って生きていてくれていたのに、この度のご逝去は誠に残念ではありますが、栄ちゃんとしては、自らの理想を貫いた人生であったと信じますので、私としては、「栄ちゃんご苦労様、色々とお世話になって有難う」、「奥様の田中仙様を始め残されたご家族の幸福を天国から見守って下さい」という気持ちで、栄ちゃんの黄泉の国への旅立ちを送りたいと思います。安らかにお眠り下さい。

地域交流センター前史

米村　洋一（元野村総合研究所・元地域交流センター副代表理事）

野村総合研究所（１９６５年設立）のようなシンクタンクを作ろうと、私と同期の理工系の友人たち５人で「㈱エンジニアリング・シンクタンク」という名称の会社を１９６９年設立した。当初は工学系のエンジニアリングコンサルを目指していたが、仕事がほとんどなく低迷していた。たまたま私が従事していたカンコロジープロジェクトでは散乱ごみの調査など、フィールドワークの仕事のウェイトが高く、このような仕事をコストの高い野村総研の社員が行うことはコスト面から問題があったため、外部でアルバイトを使ってフィールド調査を行う下請け事業を彼らに委託することとなった。

このカンコロジープロジェクトを機会に同社は実践的に役立つ事業活動を目指そうということで、シンクタンクではなくドゥタンク・ダイナックス（以下ダイナックス）と社名を変更した。

ダイナックスは野村総研とともに、日光など観光地や渋谷、池袋などの繁華街の散乱ごみ調査をもとに空き缶の散乱ごみ対策システムを開発、普及させる役割を担うこととなった。さらに空き缶問題は散乱から使い捨てそのものが問題視されるようになり、その対策もカンコロジープロジェクトで推進することとなった。

こうしてダイナックスは散乱ごみ調査、さらには自治体のごみ処理を資源リサイクル型に転換することで、あき缶の使い捨て問題の解決を図る一連のカンコロジープロジェクトの実践部隊としての活動を行うこととなった。ダイナックスはカンコロジープロジェクトをきっかけに、缶詰の中身の商品計画、さらには食品関係の企画の仕事などを独自で獲得できるようになっていった。またカンコロジープロジェクトをきっかけに、野村総研と共同して自治体のリサイクル型ごみ処理計画策定や、その他の環境関連プロジェクトに取り組むこととなった。

ダイナックスでの仕事を進めるうちに、事業拡大のための人材確保が課題として浮かび上がり、ダイナックスの取締役小野貴邦氏（山口県萩高校出身）が「同郷の萩の商業高校出身の田中栄治がシェル石油の仕事が面白くないと腐っているので、ダイナックスの仲間に入れよう」と提案した。

空き缶を含め、一般廃棄物の処理については自治体の専管事項であるため、事業推進の上では自治体との協力が不可欠であったが、田中栄治氏はこの中で自治体職員とりわけ自治体のトップとのコミュニケーションが巧みであることから、１９７５年頃からはダイナックスにおけるカンコロジープロジェクトの中心的役割を担うようになった。小野氏はマーケティング・消費者調査、竹川征次氏はマーケティング、商品のコンセプトデザイン、田中氏は自治体、官庁など公的セクションへのアプローチを担当した。後にダイナックスはこの３名で分社化することとなり、小野氏は㈱ドゥ・ハウス、竹川氏は㈱ダイナックス、そして田中氏の地域交流センターという３つの組織ができることとなった。

地域交流センターは当初から公的活動を民間で実践という基本姿勢があり、当時は日本にはＮＰＯという制度がなかったので、田中氏は官僚や法律家とも相談し、地域交流センターは任意団体とし、契約などの再法人格を必要とする場合に対応するため、株式会社地域交流センター企画を設立した。この株式会社は、公益性を担保するために定款で利益配当制限（公定金利以上の配当はしない）をうたったユニークな会社であった。１９９８年になって日本でも「特定非営利活動促進法」が制定され、ＮＰＯが制度として認められるようになり、地域交流センターは任意団体からＮＰＯに変更された。

＊カンコロジープロジェクト

１９６８年、野村総研に東洋製缶㈱からの調査研究打診があり、当時私の上司であった友永剛太郎氏が受託を決意、後のカンコロジープロジェクトが始まった。

クライアントである東洋製缶と野村チームとのスタートアップミーティングはホテルニュージャパンで２泊３日の合宿で実施、ＫＪ法で模造紙６枚に及ぶ戦略的指針をまとめた。（カンコロジープロジェクトはこの方針書に沿って展開された）

東洋製缶は当時すでに企業の社会的責任、社会的問題に対するリスクマネジメントの考え方がトップ（高崎辰之助社長）によって徹底されていた稀有な会社であった。散乱ごみ対策の基本は廃棄物処理法でも定められている通り、問題のある場所の管理者が適切な対応をすることが基本であるが、当時は散乱ごみに対する専門的知識、技術を有する専門家は皆無であったために、散乱ごみの実態調査から始めることとなった。このような状況からダイナックスは野村総研とともに散乱ごみ対策に関する最初のエキスパートとなった。

田中さんは私の人生を変えた人

山本耕平（株式会社ダイナックス都市環境研究所代表取締役・地域交流センター副代表理事）

田中栄治さんは私の人生にもっとも大きな影響を与えた人です。一九七七年に東京の大学を卒業して神戸市役所に就職し、順風満帆の公務員人生を歩む予定は、田中栄治さんとの出会いで早々につまずき始めました。私は学生時代のゼミで「東京ごみ戦争」をテーマ

に論文を書いたことから、環境局計画課というごみの担当課に配属されました。そこにコンサルタントとして登場したのが田中栄治さんと米村洋一さんでした。当時の担当係長が、田中さんが主宰する「花の係長会議」のメンバーだったためです。学生時代に一度だけ、寄本勝美先生（故人）に神楽坂の「集」に連れて行ってもらったことがあります。そのときに田中さんと会った記憶はないのですが、いろいろと面白い会をやっているということは覚えていました。神戸市役所では田中・米村コンビは、旧弊固陋な役所の会議を快刀乱麻を断つごとくコーディネートするテクニックに感心し、こういう立場で仕事をしてみたいと思うようになりました。田中さんからはサロン集の話や「ゴミニティ」の話をよく聞きました。その影響を受けて、神戸でサロンの真似事を始め、神戸に視察に来た他市の職員や関係の事業者に声を掛けて「関西ゴミニティ」なる会を立ち上げました。

田中栄治さんはすぐに人を誘いますが、私には「市役所辞めて東京に来ない？」という悪魔のささやきがありました。環境局で四年つとめて企画局に異動して、神戸都市問題研究所の仕事をしていましたが、市民や現場と接点のない仕事に飽き足らず、ついうかうかと田中さんの誘いに乗ってしまいました。結婚して半年もたたずして、安定した仕事をすてて東京に舞い戻ってしまったわけです。

田中栄治さんが率いる組織は「ドゥタンク・ダイナックス環境問題研究部」でした。新橋駅前の雑居ビルに五人くらいのスタッフがいました。驚いたことに一年もたたないうちに田中さんは「地域交流センターを立ち上げるからダイナックスは分社して新しい会社を作ろう」と言い出す始末。現在のダイナックス都市環境研究所はそうしてつくった会社ですが、仕事の仕方も、ましてや仕事の取り方も全くわからない手探りでしたので大海に放り出されたようなものでした。当時私はまだ三十前、田中栄治さんは四十歳くらいでした。

よく飲みました。終電すぎてタクシーで帰宅したこともたびたびありました。田中さんは思いつきや漠然としたアイデアを話しながら考えをまとめる人でした。酒の席の話題だと思っていたら話の中でキーワードをみつけて、「面白いね、それやろう」となります。田中さんとつきあいのあった方々は、みなさん頷かれることでしょう。田中さんがすごかったのは経験も専門知識もない分野でも道を拓いて軽々と越えていくところです。全国首長連携交流会もそうですし、「まちの駅」のネットワークもそうです。この二つの仕事は田中栄治さんのもっとも面目躍如な実績で、田中さんしかできなかった「仕掛け」だと思います。田中さんが残した数々の仕事はぜひみんなでつないでいきたいと思います。

田中栄治さんを偲ぶ

井出　隆雄（ジャーナリスト・地域交流センター応援団長）

人と人を結びつけることに情熱

１９７４年（昭和４９年）の秋だっただろうか、朝日新聞社会部に籍を置き一時、東京版の城北地区（練馬、豊島、北の３区）を持ち場にしていた私は豊島区で、捨てられた空き缶を販売店に持って行くと、１０円貰える仕組みの「社会実験」をするという話を聞いた。

当時の東京は〝ごみ戦争〟の真最中。捨て場である江東区の埋め立て地に向かい、処分場を持たない区に委託されたごみ満載のダンプが、汚い汁をまき散らし通過地域沿いの公道を砂塵をまき上げて走り回っていた。

その無法ぶりに耐えかねた沿道の主婦を中心に、関係住民は怒りの声を強め、新聞・テレビでも「ゴミ問題」が報じられない日はなかった。この空き缶処理方式は資源の有効利用という意味でも着想が新鮮なので、市民権を得そうである。どんな人が発想したのか区の関係者に聞いたら「シンクタンクの田中さん」だという。

電話をするとシステムの説明もそこそこに、神楽坂の神社近くにオープンしたばかりのサロン「集」のＰＲを始めた。彼が公認会計士としての仕事をした唯一無二の会社のオーナーが、「新築したビルの地下室は当分使う予定がない。好きに使って良い」と言ってくれた。当時は携帯電話もポケベルもない。向上心の強い人たちは、場所・日時を決めて集まり、講師を招いて各分野の話を聞いたり、互いに情報の収集・交換に力を注いでいた。かねがねそうした場所を探し、交流の輪を広げることに関心が深かった彼にとっては願ってもない話。「貸してください」と即答、直ぐに八卓、約五十人収容の談話室に模様替えした。

誰もが夢見た社交場を創出

早速、思想、哲学、文学を語る会や、技術・環境論を戦わすサークルが出現した。しかしそれだけでなく、将棋を教えながら世界旅行をした人や、イランの革命を現地で経験した人たちで構成する「世界を語る会」、ジュークボックス全盛時代だというのに、流行歌のことなら時代、作者、背景まで何でも知っている、というＰＣ顔負けの出版関係者を中心に、歌われた時代に思いを馳せる「どこまで聞けるかい」。酒蔵設計専門の一級築士や雑誌編集者で構成するデキシーランドジャズバンド（これは後に「幻の日本酒を飲む会」に変身した）など、遊び心を満たす会も十近くあり、そこでしか逢う機会のない様な魅力的な人たちが、連日押しかけた。極め付きは国際港湾協会の職員で英仏語に堪能な美人女性による外人向け「花札の会」。鼻の下の長い日本人男性が参加したくてうずうずしていた。

人は若い時代、色々な夢を見る。中でも心を許し合った仲間と度々訪れ、酒を酌み交わしながら人生、社会、将来の希望などを語り合い、明日への糧を育む場が存在したら、どんなにか楽しいだろう。でも地価の高い都市部ではそんな贅沢が許されるわけがない。多くの人が夢見つつも諦めざるを得なかった場所がそこにあった。

仕掛け人が田中さんだった。山口県萩市の近くで生まれ育った。地元の商業高校を出て福岡の大手商社の支店に配属されたが、学歴社会と悟り、慶應義塾に進み、ウェイトリフティング部で活躍する傍ら最年少で公認会計士に合格した。中学・高校の仲間が一足先に立ち上げたシンクタンクに学生時代から参加してノウハウを学び、世間のニーズにも敏感になった。中でも大都市と農山村部のギャップ、それぞれが抱える問題などの解決に力を注いだ。温顔なうえ柔らかな口調でいつの間にか相手を自分のペースに引きずり込む。空き缶はビール、ウイスキー、酒瓶の回収、リサイクルへと拡がった。

中央省庁幹部の私的交流会に発展

１９７０年頃、我々の夢を実現した人がいることを、西部経済部で志布志開発を担当していたころから付き合っていた建設省住宅局の高橋徹政策企画官（後に建築研究所長）に話した。好奇心の強い彼は「集」に出向いて田中さんを首実検。「中央と地方を結びつける稀有な人材。仕事の内容も面白い」と同僚の河川、道路などの企画官にも伝えたので、彼らも次々に訪れ刺激を与え合うようになった。その一人で河川畑の岩井國臣さん（河川局長を経て参議院議員２期）が中国地方建設局（現整備局）の局長時代に地域交流センターと、広島県内で共催したまちづくりシンポジウムで、有料道路にトイレがあるなら国道にも設置してほしい、との訴えがあり、道路局がこれを受けて「道の駅」設立に動き始めた。あの時代に「地域交流センター」、「道の駅」「まちの駅」といったネーミングをしたのも天才的な能力の一つだろう。

この前後から建設省だけでなく他の省庁幹部とも自由に意見を交換できる場が欲しい、という声が上がり田中さんや私が知り合いの人たちに諮ったところ、皆さん賛意を示し多い時は１１省庁の幹部が個人の資格で交流する場も生まれた。

その中には宮内庁長官をした羽毛田信吾氏、辻哲夫元厚労省次官、近藤茂夫元国土庁次官、佐藤信秋元国交省次官（現参院議員）、松田芳夫河川局長、野々村邦夫国土地理院長、経産省の中島邦雄関東通産局長、佐々木宜彦原子力保安院長、経企庁の糠谷真平次官、農水省の太田信介局長、黒沢正敬構造改善局次長、文科省の板東久美子

局長、前川喜平元次官ら錚々たる顔ぶれが、この国の行く末について熱い議論を交わした。国土開発が専門の下河辺淳さん（２０１７年８月１３日死去）は、これらの人たちとは別行動。時間が空いた時に思い出したように顔を出し、センターに出入りする若者らの元気な体験報告を笑いながら聞き、束の間寛がれたようだ。

防災では効果的な提言をしたが

関東大震災規模の地震が再び首都圏を襲う確率は３０年以内に７０％あるという。もともと河川ダムの水管理に関心が深い田中さんは、八ッ場ダム、宮ケ瀬ダムなどの建設予定地、現場を訪れ住民との交流を絶やさぬようにしてきた。また新潟地震、阪神・淡路大震災の発生から間をおかず現地で住民と交流、実体験の活用、伝承に努めてきた。そして自身が主催する自治体連携交流会参加の首長と連名で、民主党の菅内閣に対し、「被災住民に一律１千万円の住宅再建資金を無償で貸与する法律の制定」を提言した。それまでの一時補償金３百万円では後片付けしかできないため、復興が遅々として進まぬ実情が明瞭になったからである。

また新潟地震の際、小千谷市は危機管理能力を存分に発揮した。その半年前に県と合同で模擬防災訓練をした成果が実ったのである。さらに新潟、長岡市内でＢＣＰ（被災地での事業継続計画）を活用した事例を挙げ、その普及の必要性も説いた。田中さんと菅さんは同郷で、以前から仲が良く意見具申もし易かったのだろうが、内閣の足並みがそろわず採用されぬうちに東日本大震災が発生した。仮にセンターの提案が通っていたら、復興計画は違った形になっていた可能性が高い。しかし、こうした会議を通じて知り合った自治体首長、職員、学識経験者とはその後も研修会を開催、交流を続けておりセンターにとって大きな財産になっている。

米国女優に人気のウォシュレット

米国から来日した有名女優が必ず買って帰る品物はウォシュレット。日本の都市やホテルのトイレの使い心地は今や世界一との定評がある。しかし最初からそうだった訳ではない。４０年前、観光名所・京都の鴨川の厠は、今にも倒れそうな木造の貧弱なものだった。隣りの神戸市は坂の町。公衆トイレを設ける場所が少ない。そこで喫茶店の有志と相談、コーヒーを飲まなくてもトイレが借りられるシステムを作り、店先に表示板を出したら大好評。観光先進地がこんな状況では先が思いやられる、と広島市が快適公衆トイレ設置に乗り出した。続いて東京・江戸川区が、おとぎ話に出て来るような楽しいトイレを設置した。

学校のトイレも急速に変わり始めた。以前は学校で大便をすると、はやされるので我慢して痔疾になる子供がかなりいた。一方、滋賀県栗東町では中学のトイレ改良を生徒に任せたら、自主性を取り戻し学校が生まれ変わったケースもある。

私はロッキード事件や省庁担当として、各地に出張の度に寄り道して様々なケースをレポートした。田中さんは、世界のトイレットペーパー収集でも有名な慶応義塾大の西岡秀雄教授、神奈川大の高橋志保彦教授、学校建築で有名な東洋大の長澤悟名誉教授や建築家の小林純子さんたちを仲間に引き入れ、学校のトイレ研究会を設立し、トイレを校舎の中央部分に設置、社交場にする提案もした。小林さんはＪＲと組んで駅にチップ式トイレの設置も進めた。今やデパートに赤ちゃんのおむつを替えられないトイレはない。田中さんとは富士山頂上付近にトイレが誕生するのにも一役買った。これらの話を夕刊社会面で紹介すると「読者から昼飯がまずくなる、と苦情が来ませんか」。彼は冗談半分によくそう言って私をからかった。次世代が安心して引き継ぐには

田中さんが倒れてからの９年余り。センターは、資金、人材両面でピンチの連続である。「降参」と白旗を掲げても誰も文句は言えない。だいたい田中さんが健在な時代だって財政は慢性的に危機的だったのだから。でも誰もこのまま引き下がろうとは言わなかった。いつも人を信じ、笑顔を絶やさず地域・住民が相互交流して国の未来を明るくしたい、という彼の理想は今も新鮮で、心躍るものがあ

る。問題はこれ迄育んできたユニークで多彩な発想、伝統をどのようにして次世代に引き継ぐかだ。

田中さんの特徴の一つはネーミングの上手さと先見性である。中部横断道建設着工の祝賀の席で、彼は長野県佐久市と静岡県清水市（現在は静岡市に編入）の防災相互支援協定を具体化した案を示した。

みんながバトンランナーとして次に繋ぐ役割を果たそうという心積りは持っている。開催すれば多くの人に歓迎される事業を順不同で挙げると①防災・危機管理　②首長・地方議員の連携・交流　③自治体の職員研修　④魅力ある首長会への脱却　⑤「まちの駅」のあり方の再検討・全国への普及などが直ぐに浮かんでくる。まず良い企画で参加者を増やして財政力を強化する。そのためには関係の深かった方々ばかりでなく、彼は知らないがその志に共鳴する皆さん、それにマスコミの力も借りて果たせなかった彼の夢を少しでも具体化、地域交流センター共々その名を再び世に知らしめる機会を持ちたい。

蛇足を敢えて記す。ある時野々村邦夫さんと二人、彼の故郷である萩市を訪れ、吉田松陰の墓に案内された。田中さんが「まちの駅」で会津と萩を結びつけたのは、それよりずっと以前である。「まちの駅」は使い方次第で日本の基盤強化と再生の切り札になり得る。彼の脳裏には病中でも松陰と「まちの駅」の未来像があった気がする。

あなたは稀有の仕掛人でオーガナイザーでした

高橋志保彦（建築家／都市デザイナー・日本トイレ協会会長）

田中栄治さんはやんわり入って鋭く洞察するプランナーであり、オーガナイザーでした。そして人をその気にさせる達人でした。世情の先を読み、今ある問題を解決する道筋を探るための組織づくりをする。それには驚くべき田中さんの金鉱脈のような人脈の中から適材適所で直感的に集結・組織化する並外れた能力の持ち主でした。私も何度か相談され誘われたが本職の設計業務が忙しく期待に沿えないことが多々ありました。一九八三―四年ころ、当時の公衆トイレが数も少なくあまりにも汚かったので、公衆トイレを良くするために、有志を募って話し合おう、建築家であり都市デザイナーの高橋さんに是非参加してほしいと誘われ、トイレットピアという研究会に顔を出しました。当時私の設計事務所は西新橋の三谷ビルにあり、田中さんの事務所、ダイナックス・地域交流センターも近くにあり、その会合はよく新橋の八州電機地下会議室でした。大学教授、都市問題研究者、建築家、都市設計家、汚水処理の専門家、衛生機器メーカー、行政の環境事業担当官、デザイナー、消防庁の専門官など多士済々でした。日比谷クリニックの心療内科の専門医で、のちに環境大臣になられた鴨下一郎氏もおられ、神経性下痢症の子供のトイレの問題、当時逆噴射で話題になった羽田沖日航機墜落の心身症の話題に興じたことも記憶に鮮明です。日本のトイレ環境が革命的によくなる「夜明け前」と言えます。

翌一九八五年には名称付けにユーモアの感覚も交えて「日本トイレ協会」という名の任意団体が立ち上がり、会長に慶応大学名誉教授で世界のトイレットペーパーの収集家で排泄文化の話に事欠かない人文地理学の西岡秀雄先生を会長に戴き、私は副会長に推されてしまいました。これが、私が以来ずーっとトイレ協会に関わることになった発端です。第一回の全国トイレシンポジウムは名称もユニークで見事なデザインの公衆トイレをつくった伊東市で一九八六年一月「社会とトイレを考える　～公共トイレを中心として」というタイトルで開催され、トイレの前で緋毛氈が敷かれお茶の野点が行われ、メディアでも大きく扱われたのはまさに田中さんの手腕でした。海外でも大きく報じられました。そして海外でも日本に倣ってトイレ協会が出来ていきました。次第にトイレが日陰の子から日向へ出て、人々のトイレへの関心が向けられるようになりました。田

中さんのプランニングとオーガナイズの力がまた一つ花開いた時期です。その後国内の各都市で「全国トイレシンポジウム」を開催し模範となるトイレを「グッドトイレ１０」として表彰を続け、海外に視察旅行に行ったり、神戸や富山、香港で国際会議も開催されました。

始動した翌年ころ、大きな台風によって草加市を流れる綾瀬川の大氾濫があり、政府は激甚対策特別事業で堤防改修となり、右岸にある日光街道の松並木が切り倒される計画が持ち上がり委員会が開催され、私も田中さんから推薦されて委員になりました。都市デザインを専門とした私は、景観整備の大切さを訴え、建設省の担当官とも真剣に話し合い、松並木を残すことに成功しました。いま、市民の憩いの場にもなっています。

一九八七年頃、私の事務所が手狭になり芝に引っ越すとき、ぱったり新橋駅で田中さんと会い、「それはいいニュース、三谷ビルに私が入るよ！何とかオーナーに話をしてよ」と頼まれ、交渉の結果できたのが都市小屋「ゆう」（後に集＆ＹＵ）でした。ここには多くの人がよく集まり、ビールを飲みながら社会の問題を話し合い、異業種交流や多様な団体の集まる部屋で、いわば現代の「寄合」でした。よく語り合い、学び合い、行動に移しました。

二〇〇九年、任意の文化団体であった日本トイレ協会の当時の数名の事務局が袂を分かち、事業を主体とする団体を立ち上げて離れたとき、毎年開催していた「全国トイレシンポジウム」の開催が危ぶまれました。田中さんと相談をして、当時「新しい公共」を着想していて、川の駅連携を構想していたこともあり、松戸市で川の活動をする団体との共同で「川の駅・トイレ／ジョイントフォーラム２００９」を開催し、田中さんの親しい荒川沿いの市町村長や個人として宮内庁長官の出席も頂き、大成功裡に開催できたことは記憶に新しく、事務局員が一人でも活発に活動できる団体に仕上げるきっかけになりました。西岡先生の持論「トイレは学問」の考えを引き継いで「トイレ学大事典」も発刊し、一般社団法人化し今や二〇〇人の会員数で、調査研究、各種活動を行い、国際交流もしています。これも田中さんの想いと繋がっていて、今後も人のため、社会のため、地球環境保全のために輪と和を広げて協働していきます。

田中栄治さんと幻の日本酒を飲む会

篠田　次郎（幻の日本酒を飲む会　会長）

○田中さんとの出会い

私は当時、アマチュアのキャナルストリートメンというニューオーリングジャズバンドのメンバー（トロンボーン）でした。メンバーは、ＣＦディレクター、カメラマン、プロダクション経営など、トッポイ職業人たちでした。練習場がなく、赤坂あたりのクラブを休日に借りたりしていました。メンバーの一人が、「ギャラなしだが、演奏させてくれるところがある」と話をもってきたのが、神楽坂の「集」でした。ヘボなジャズを演奏する。それは「聞かせたい」ばっかりの欲望からです。リスナーを連れ込みますから「集」も採算が合います。

○吟醸酒との出会い

ジャズメンバーは、いい収入の連中でした。スコッチや輸入ブランディーを飲んでいます。飲みながらの演奏です。私は蒸留酒がダメなので、手持ちの吟醸酒を持ち込んでいました。当時、日本酒は「ダサイ酒」とされていました。が、トッポイ職業のバンドメンバーは、なぜか私の酒に手を出すのです。「集」のマスター田中さんはそれを見咎めました。「篠田さん、彼らは篠田さんの日本酒を飲んでいますね。この店には外人も来ます。みんなに飲ませようと日本酒を用意していますが、外人も日本人も日本酒を飲みません。それなのに、彼らはなぜ日本酒を飲むのでしょうか？」

「田中さん、この店の日本酒、出してください」。出てきたのは、当時評判の「ＫＢ」でした。私は、持ち込みの吟醸酒とＫＢを並べて田中さんに飲ませました。「うん、こちらは飲める」。

○幻の日本酒を飲む会の発足

「篠田さん、このようなお酒を揃えられますか。ウチに来られる人たちに、こういう酒を飲ませたいのです」という田中さん。酒蔵設計者として吟醸酒を知っている私には、渡りに船の話です。手元に、設計先の山形県「米鶴」と青森県「桃川」の大吟醸が取り寄せてあります。あといくつか探し出して、「集」で酒の会をやろう。

昭和５０（１９７５）年１２月３日、「幻の酒を求めて」という会が「集」で開かれました。参加者は、女性二人を含み計十二人、会費は１５００円と記憶しています。

酒は、前掲の２銘柄の他に、「秋田吟醸酒」、「越乃寒梅超特撰」、「福正宗オールド」と計５銘柄。みんな「こわごわ」飲んでいました。当時の市販酒は「二日酔い必須」だったからです。酒はうまい、田中さんの軽妙な司会、ゲストに呼んだ醸造試験所主任研究員の池見元宏先生の砕けた酒談義。参加者の皆から、次回の開催を約束させられる。こうして、以後４４年、６５０回を超す例会を続け、吟醸酒を社会に認識させ、全世界に輸出して好評を得る震源はあの神楽坂の「集」にあったのです。

○「幻の会」が「集」を離れる

「集」は、間もなく、神楽坂から西新橋に移ります。「幻の会」は、ＮＨＫテレビなどマスコミ、ニミコミに幾度も取り上げられ、吟醸酒の社会認知になったと思います。ある有名銘柄特集の時は客が押し掛け、地下の店への階段にも客を座らせる有様。レギュラーメンバーは、「酒が足りなくなる」と、当該銘柄を飲むのを止めたほど。

そしてこの店で約１０年、１００回を超す例会を開きました。が、平成に入って、この店を明け渡さねばならないことになります。「幻の会」は、「集」から外に出ることになりました。以来、３０年も「幻の会」は続いていますが、現会員で西新橋を知る人は五人もいますまい。神楽坂を知るのは私を含めて二人か。

以後も、田中さんとは時々会っていました。いろんな企画を相談されました。某日、田中さんが生家の法事に戻られ、そこで倒れたとの知らせがありました。そして先日、９年も寝たきり状態のまま、お亡くなりになったとの知らせがありました。そのころ、私は、日本醸造協会雑誌（明治３７年創刊の唯一の酒の学術誌）に、「日本酒の現況」の文を投稿していました。中に、田中栄治さんの名を載せています。

ご冥福を祈ります。

田中栄治さんを偲ぶ

廣池通彦（流通部会世話人）

田中さんは不思議な魅力のある人だ。公認会計士でありながら、その技量は使わず「人との交流」に一生をささげた人という印象だ。その結果は「集＆ＹＵ」「地域交流センター」に集約された活動だ。中でも「集」は最も影響を受けた。私にとっては人生の様々な分岐点で「集」の影響があった。

田中さんとの出会いは約半世紀前、私が勤めていた会社の応接間、その時「今度面白いサロン(飲みながらディスカッションするノンポジュウム)を作るので開店したら遊びにこないか」。サロンは神楽坂にあり「集」と名付けられ、最初の1年間は様々な講師が適当な話をして、そのあとで飲みながら、食べながらディスカッションをした。それが新鮮であり刺激的でもありよく通った。特に印象に残っているのは「ラストフライデーパーティ」だ。

様々な分野より参加者が増え2年目より田中さんの発案で専門分野ごとの分科会を発足することになり、私たちは流通部会を作るこ

とになった。月1回の開催で300回ぐらい催したであろうか、講師は現役の実務家が殆ど、フォーマルな講演では聞けない現場の生の話を聞くことが出来た。又同業者であり同じ悩みや喜びを抱えている友がいて共感も多い、その後の人生の友となった人もいた。

「集」は私の人生の最大決断をサジェスチョンしてくれた。ある講師の話を聞く機会があり「これからは(40年前)人生80年現役時代になる、定年後は長い、そのことを頭において、今何をすべきかを考えなさい」。この言葉が私の早期独立を決断させたのであった。

もう一つは流通部会のメンバーが中心となり、中国上海の民族資本と合作してSM(スーパーマーケット)、CVS(コンビニエンスストア)のチェーン展開をしたことだ。我々が指導して、運営は中国がするとの役割分担であった、合作は順調であり、店舗も一気に増加した。だが政府の方針もあり、合作は4年で中止となった。

私には「集」イコール田中さんであり、「集」での様々なできごと、出会いが人生の糧となった。田中さん、ありがとう、安らかに。

田中さんはいつも、にこやかだった

山本　忠順（(株)LAU・元キーワードと遊ぶ会世話人）

田中さんを偲ぶとなれば、「都市小屋・集」のことから始めなければならないだろう。

「都市小屋」は、まさに都市の異空間と感じられた。山に山小屋があるように、都市には「都市小屋」がなければならない・・・という謳い文句に、まず痺れた。「集」は新橋の一角、地下の狭い小部屋に、得体の知れない連中がたむろして飲み語り、自由そのものだった。

「集」が手狭になって、近くに都市小屋「YU」が出来た。私は「YU」の世話人を自任して、企画を立て、きちんとゲストを呼んで講演をしてもらう真面目な勉強会を毎月開いた。ゲストには、建設省や国土庁（当時）の若いお役人を口説いた。アポなど取らず、直接体当たりで講師をお願いした。その時には、必ず田中さんの名前と「都市小屋」の新聞・雑誌の記事を見てもらった。たいてい二つ返事で承諾してもらった。

今思うと驚くべきことに、些少の交通費のみで、講師料はゼロ。講演の後の飲み会に加わってもらって、それは実に有意義で楽しいひと時となった。

私は勝手にやらせてもらって、田中さんはたまに参加し、いつもにこやかだった。いい時代だったと、しみじみ想う。

新橋の田中栄治さん

森川和久（サロン集会員）

一九七一年三月、ローマへ留学する先輩の歓送会で指定された神楽坂の会場に出向いた。営業を始めたばかりの「集」であった。それ以後頻繁に出入りすることになる。店主（当初は小野氏と田中氏の共同経営とは知らずもっぱら小野貴邦・まゆみ夫妻の経営と思いこんでいた）はもちろん集う客層も若く、活気あふれる喫茶店兼スナックという印象だった。その後も人が人を呼び、毎晩何らかの集まりが催され出会いの場として定着していった。

業容拡大と利便性を求めて新橋の小川ビルに移転、社名もダイナックスからドゥ・ハウスへ改名、都市小屋「集」として、若き起業家として小野氏はマスコミに紹介され、ますます人が集まる。その後小野氏が四十過ぎの若さで亡くなってからは田中氏が名実ともに看板男となり、サラリーマンのアフターファイブのクラブ活動の場として広く知られることとなる。ダイナックスというマーケティング会社のサロン部として始まった「集」があれほど進化するとは。

医者・弁護士・公務員・政治家・音楽家など多様な職種が集う中、地域の活性化をテーマに日本中に活動を広げて行った功績は大きい。いつも笑顔を絶やさず常に暖かく接してくれたことをありがたく思い出す。生涯現役を貫いた七十余年に敬意を表し、ご冥福を心から祈りたい。

希代のアイデア・プランナー

二井康雄（元「暮しの手帖」副編集長・元サロンの「流行歌どこまで聞ける会」世話人）

もう50年ほど前、神楽坂の「都市小屋・集」で、田中栄治さんと出会った。さまざまな職種の人が集まる、山小屋ならぬ都市小屋で、いわゆるサロンである。あちこちの居酒屋でサラリーマンたちが呑んでいる。仕事の話は出ても、上司の悪口や愚痴が多い。たいていは、くだらない話ばかり。せいぜい、1プラス1で2である。田中さんは、サロンのことを、職業の地位やしがらみを超えて、呑み集う場所だから、コミュニティをもじって、「ノミュニティ」と言っていた。地位、立場、職業の異なる人たちの呑みながらの話は、1プラス1が2ではなく、3にも4にもなる発想だ。

サロンには、いろんな人がやってくる。中央省庁の役人、マスコミ関係、建築家、芸人、コンサルタント、職種不明の人などなど。さまざまなテーマで、いろんな会合がある。ビジネス関係の会合にまじって、趣味的な集まりも多い。

田中さんは、「サロンでは好きにやっていいよ」というので、流行歌の好きな人を集めて、「流行歌どこまで聞ける会」を主宰した。ただ、古今東西の流行歌をレコードやテープで聞きながら、呑んで、わいわい騒ぐだけの集まりだが、いろんな人と知り合うことが多いせいか、多くの人が集まり、この会は、20年以上も続いた。

田中さんは、コンサルタントを兼ねたシンクタンクを経営していても、「飲み屋のおやじ」と言っていた。神楽坂から新橋に移転しても、ずっと、飲み屋のおやじだった。本職のシンクタンクは、中央省庁や自治体に政策提言をし、調査し、報告書にまとめる。廃棄物処理や資源化、俗にいう「まちづくり」一般、地方の境界を超えた首長の連携、道の駅構想など、田中さんの発想は、いずれも斬新なアイデアに満ちていた。その残した功績は、数えきれない。

田中さんは、公認会計士なのに、絶対に、金儲けはしない。しようとしない。それがみんなに愛されたのかもしれない。なぜか、いろんなところに呼んでもらった。あちこちで開催される資源化シンポジウム、道路の交通実験、利根川上流のダム視察、中越地震の被災地などなど。なぜかいまだ分からないが、社員旅行で、有馬温泉にまで、呼んでもらった。その都度、軽く呑みながら、日本のさまざまな社会実験の必要性や、そもそも日本を、どのような国にするのかの夢や構想を説いていた。

その都度、報告書など、いくつかの印刷物や本の編集、作成の仕事までいいつかった。神楽坂から新橋に移ったサロンでは、毎月のイベントを知らせるサロン誌の編集まで頼まれた。謝礼よりも、やっている作業の中味がおもしろく、役に立つ情報でいっぱいだった。

なぜか、田中さんは、いわゆる大物といわれる政治家や、漫画家、芸能人、中央省庁の局長や審議官クラスの人たちを多く知っていて、サロンに呼んでいる。ふだんは聞けない話が聞けて、これは勉強になった。

田中さん、早すぎるよ。いまの日本、まだまだ、社会実験が必要だ。もったいない。希代のプランナー、田中さんの残した運動体「地域交流センター」は、その遺志を継いでいるはずだ。まだ、「ノミニティ」は続いていると信じたい。

田中栄治氏を偲ぶ

久武　経夫（ICカード研究会世話人）

三菱重工業㈱で同期の奥田澄雄氏に誘われて、新橋の「サロン集」の「テクノロジーフィクションの会」に参加した。これを契機に、集で「ロボット研究会」「ICカード研究会」「ニューメディア研究会」等を雄姿の方々と創設した。300回を超えて中断した「ICカード研究会」等、再開を模索中である。

文系の田中栄治氏は、これらの研究会には参加しないが、講話と質疑が終わる頃に現れ、「閉店長」として、2次会場の中華料理屋や居酒屋「たぬき」に付き合うのが常であった。

田中栄治氏とのプロジェクトの付き合いは、野村総研の米村洋一氏が持ち込んだ「散乱ごみ収集システムの研究」に巻き込まれ、当時所属していたキャタピラー三菱㈱神奈川支店にいた同期の剣持氏を動員、タイヤ型積込機械（ホイールローダ）のバケットを金網構造に改造した「海浜の散乱ごみ収集機械」を創り、実験をしたことから始まった。以来、「道の駅」「まちの駅」「健寿の駅」等、地域交流センターの事業を近場で観察させて頂いた。

田中栄治氏は、議論の細部には口を出さないが、議論を尽くすために、対立意見の出ない検討会の場で「異見」を引き出す天才であった。

田中氏の一見「突飛な発言」を契機に、討議が面的な拡がって行く。専門的な議論で気後れしている寡黙な参加者に発言を促す配慮とも窺える手管である。そして、議論が沸騰する頃、本人は冷蔵庫と飲み席を往復する「ビール番」に早変わりするのである。

何方にも与しない素振りのできる組織感覚が、サロン人脈の形成、人材の育成、組織の面的な展開の秘訣であった。

「人」と「人」との情報交換には、① 言語および記号の情報系、② 動作および感覚の情報系、③ 意識およびイメージの情報系がある。対人や場の理解への①に依る成果は10数%と言われているが、田中栄治氏は、②、③の言語外情報交換（空間の理解と参加(交流への戦略）の達人であった。そして、自己と社会（自己が存在する空間）の認識に就いて自閉的な日本人に対し、客観的に観察した自己を認識している欧米型思考の保持者であった。

人を動かす術、行政を動かす術等田中栄治の特異な才能と生み出した様々な仕組みを、田中栄治氏への思いと伴に、更に展開して行きたい。

300回以上続いたニューメディア研究会の立ち上げ

倉島　渡（ニューメディア研究会世話人）

1986年1月のNTT民営化直後の時、私が「ニューメディア」のことで、集&YUで講演したのをきっかけに、田中栄治様の提案で、当時の郵政省の小嶋弘様、キャタピラー三菱の久武経夫様、テクノネットの坂井常雄様の4人が世話人になり「ニューメディア研究会」を立ち上げました。その時のホットな電子情報通信の専門の方にお出でいただいて話を聞き、日本社会へのインパクト、日本の将来を語りあう会で、その後30年間、ほぼ毎月開催し、300回以上開催の集&YU最長の会になりました。

集&YUではニューメディア研究会以外にもいくつかの研究会が開催されていたので、私は自由に参加して、勉強させていただきました。どの会でも必ず田中様が愛した吟醸酒をいただきました。そのうち吟醸酒の仕掛け人の篠田次郎様に教えを受け、日本酒に興味がなかった私が、いつの間にか、すっかり吟醸酒党になっていました。

ところで、田中栄治様は、一度お会いしたら、ほとんどの方の名前を憶えておられたのには感服しております。また、いつも皆さんが集まる会では、俯瞰的な独特な視点で発言され、感心していました。それでほとんどの方がひきつけられてしまうのでしょう。これが田中様のビジネスがうまく進んだ秘訣かも知れないと思っています。

倒れてから、いつか回復してお会いできる日を待っていましたが、ついにお会いできず、残念に思っています。惜しい方がいなくなり、寂しく思っています。

今までありがとうございました。ご冥福を祈ります。

～サロン「集」、ぼんずの会、そして健康の駅～

大倉久直（医師・健康の駅推進機構会長）

１９７５年、晴海の展示場で開かれたリサイクル展で、展示ブースの一角に空き缶を積み上げ、傍らのデスクで、ニコニコしている男性と目が合った。それが田中栄治さんとの出会いだった。ドウタンクと名付けたベンチャーを立ち上げ、カンコロジーと名付けた空き缶のリサイクル実験を、楽しそうに語る魅力に引き込まれ、開店間もない神楽坂のサロン・都市小屋「集」に出入りする様になった。以来、集が新橋に移ってからも、色々な会に関わり、多くの人たちと知り合い、有意義なアフターファイブを過ごして来れたのは、田中栄治さんとの運命的な出会いのおかげである。

その中で、滝野弘さん、寺尾慶円さんと私が立ち上げた、ぼんずの会は、人生、病、宗教などについて、その道の先達のお話を伺い、グラス片手に気楽に議論をするユニークな集まりだった。

この会を１００回超えて続けられたことは、自身の人生においても、得難い勉強の機会だった。自らの癌を知り静かに話す手塚治虫さん、比叡山の千日回峰行の体験談、本願寺から米国に派遣された僧の布教活動、日本モスレム協会幹部によるイスラムの教え、エホバの証人の教え、開眼体験を経て教祖となった大真空教の教え、国立がんセンターの医師から益子の西明寺の住職となり、仏教ホスピスを開いた田中正博先生、などなど、貴重な話を伺った。

また、山岸さんが主催されたクラシックを気軽に楽しむ会では、日フィルの石井楽団長を始め、多く方達の演奏を楽しみ、交流を深めることができた。戸外に出る機会としては、オオムラサキの会、畑の会、利根川～江戸川の連携、Ｅボートなど、それぞれ楽しい集まりであった。

田中さんが仕掛けた提言・実践首長会、道の駅、まちの駅、日本トイレ協会、Ｅボートなどは、全国規模に広がり、今日まで続いているが、彼の構想した駅は、川の駅、海の駅、健康の駅、健寿の駅、防災拠点としての駅、などに展開が進んでいた。

田中さんのアイデアで始まった健康の駅は、健康推進に特化したまちの駅として、正しい健康情報と地域の医療、介護、健康関連の情報を提供し、より元気になれる健康サービスを無料または適正価格で提供する施設を、認証することで、質の担保を図ることにした。久住時男見附市長と石川治江さんと共に、健康の駅推進機構は、ボランテイアの専門家を含んだ認証組織を作り、これまでに北海道から沖縄まで、全国で２０以上の駅を承認してきた。自治体が作った健康の駅では、提言・実践首長会のメンバーが先頭に立ち、新潟県見附市、秋田県横手市、三重県いなべ市などで、大学との共同研究で、プログラム参加者の健康指標の改善と、医療費の削減効果を検証してきた。また民間の医療機関や介護施設、温泉などの保養施設などでは、それぞれ独自の健康サービスを提供している。参加施設はまだ少ないが、現在は、地域交流センター内に事務局を置き、質を担保しつつメンバーを増やす努力を続けている。

かつてドウタンク・ダイナックスをたちあげた3人のうち、小野貴邦さん、竹川征次さんに続いて、田中栄治さんまでも、あちら側に行ってしまった。しかし、それぞれが残した有形無形の贈り物は、アイデア、人と地域の連携、足元からの世直しに成果を残し、多くの人たちに受け継がれている。とりわけ、田中栄治さんの影響の大きさは、昭和－平成の稀有なカリスマとして、我々の心に住み続けるだろう。

自分の周りの友人達も、半数以上は亡くなり、遠からず自分の番もやって来るものと覚悟しているが、運良くあちら側の天のサロンにたどり着けたら、田中栄治さんが、ニコニコ話している姿に会えるだろう。合掌。

田中栄治さんを偲ぶ

石川はるえ（NPO法人ケア・センターやわらぎ）

●「学びの多い時間を頂きありがとうございました」

●地域交流センター理事、健康の駅推進機構理事など。

●「道の駅」「まちの駅」「川の駅」「健康の駅」など次々と駅の構想をニコニコとして話す田中さんの佇まいは、まるでやんちゃ坊主のようでした。思わず「最後は「辟易の駅」をつくるのだ」と言ったらおおいに笑っていた。そのほかにも沢山のエピソードを思い出すが、私の想い出の極め付きは、約束がない事務次官室に行き、10年も前から約束しているかのように堂々と事務次官います？と軽く聞く。対応してくださる職員の方は、きっと約束の方だと思うのでしょうね、すぐに取りついでくださる。あのテクニックと度胸とズーズーしさはすごい。そして、だいたいの事務次官は会ってしまう、という場面に出くわすと、やっぱり不思議な人だ、との心情を思い出す。

田中栄治さんのその志と行動は、地域交流センターに集まる方がただけでなく、多くの人々に染みわたり自らの実践のヒントや糧になっていると断言できます。

嵐のごとく走り抜いてきた田中さんからいつものように「違う、わかりやすく言えばこうでしょ」など言いたいこともあると存じますが、どうぞゆるりとして頂き、私たちを見守ってください。

多くの学びを頂きましたこと、本当にありがとうございました。

田中さんを偲んで～「集」の思い出

河原詳次（サロン集会員）

東京は、西新橋にあるスナック「集」を発見したのは1982年7月のある日、たまたま友人と昼食をとるためにとび込んだのが、以来私の遊び心を呼び醒まし、生活習慣を大幅に変えるきっかけとなったのである。

入って見ると何の変哲もない店だが、都市小屋サロン「しゅう」とありユニークな会名の月間スケジュールが一面に掲示されていた。「幻の日本酒を飲む会」「クラシックを気軽に愉しむ会」「山小屋を造る会」「ニューメディアの会」「変ろう会」・・・等々。

これは面白そうな〝場〟を見付けた。会社から近いのになぜ気付かなかったのかと、むしろ悔んだ程で、その夜早速入会したのは、言うまでもない。年齢、職業、肩書、性別等関係なく、自由に出られるのがよかった。当時私は、大手総合電機メーカーに勤めており、ある程度の趣味は持っていたが、物足りなさを感じていたのは事実である。

これだ！これこそ内心望んでいたものを私にチャンスを与えてくれたのだと小躍りした。

私が真っ先に参加したのは「幻の日本酒を飲む会」である。三種類の銘柄について全員で利き酒をし、談笑の合間に会長から蘊蓄あるお話を伺う。馥郁たる吟醸香が漂い、若い女性も頬を染める。自分の舌に合う吟醸酒に巡り合った時は、至福以外の何物でもない。

会長の篠田次郎氏（元日本吟醸酒協会会長）は、全国的に酒倉の建築設計を業としているが、醸造研究家としても論文や著作が数多い。吟醸酒は、品評会用または酒倉のオヤジさん専用であったのが、今日これ程までに一般化されたのは、同氏の功績によるものと言っても過言ではない。私など以前から飲めばよい、酔えればよいと言うように単なる呑兵衛であったのが、この会のお蔭で、教養としての〝酒仙道〟を、いささかでも身に付ける事が出来たと思っている。

「クラシックを気軽に愉しむ会」では、内外のベテラン演奏家やオーケストラのトップ奏者が、膝突き合わして演奏され、サロン・コンサートの醍醐味を存分に堪能させて貰える。こんな贅沢はない。

ある日「世界を語る会」で、棋士の森下卓九段が四段（十九歳）の時、勝負師としての生き様、夢などを交え「勝負の世界」について語られたのが、今でも印象に残っている。

この他にも、モダンダンスの会、タイ国キャラバン報告会、邦楽と落語を聞きながら隅田川を下る会など、少しでも興味をもって参加した結果、最初の1年間で何と40数回の記録を残している。

何れの会も軽食とアルコール付きなので大変盛り上がり、雰囲気は申し分ない。それにつけても、熱心な関係者には感謝してもしきれない気持ちである。

このように、社内のみの枠を超えての交流は、自分の世界が広がって大いにエンジョイし、回を重ねる毎に生き甲斐さえ感じるまでになった。多くの素晴らしい友人との出合いは、今でも貴重な宝となっている。

「集」が当時の生活の起点になっており、今なら言えるが、公私共に最優先させてきた。「集」を知ってから、飲むために飲み屋に行くことは、自然と消えていったし、当然の結果であった。

「趣味を通じて仲間との交流と発展」、これが私の信条であり、願いでもある。サロンで演奏された日本フィルハーモニー交響楽団の楽団員達と親密になり、同会員としての演奏会へは勿論のこと、進んで市民コンサート作りの実行委員（ボランティア）となって今に至っている。1985年の欧州公演の際には、楽員の家族共々現地での演奏を楽しみ、親交を深めた。

88年からは「俳句と遊ぶ会」にも仲間入りした。

二井康雄氏の主催する「流行歌どこまで聞ける会」にも頻繁に出入りし、終了後オーナーの田中栄治氏をまじえ新橋の「やるき茶屋」で遅く迄打ち上げに興じたものである。

トシコロジーからお台場Eボート防災交流大会へ

中野　恒明（芝浦工業大学名誉教授・㈱アプル総合計画事務所・代表／元サロン・トシコロジー会世話人）

(1) 田中さんとの不思議な出会い

田中栄治さんとの出会いは「集」の神楽坂時代の確か1978年、槇総合計画事務所の上司・故渋谷盛和さんが、弱冠26歳の私を後継の都市小屋お守り役に指名したことに始まる。その理由は事務所のボス・槇文彦さんが東大教授に内定し、渋谷さんが代表取締役に就任するとか、サロンに気楽に出入りし難くなるかも、と半ば強制連行され、田中さんに紹介、君は山口県つながりだからね、の一言でその後の深い縁となってしまった。いまある私の生きざまに大きな影響を与えてくれた良き兄貴分、田中さんとの出会いであった。

(2) トシコロジーから数々の仕掛けへの参加

程なく、サロンは新橋に移転、田中さんから要請され、始めたのが都市を話題とした勉強会「トシコロジー」、共同世話人は田中公夫さん、早見静雄さん、松浦いづみさんなどと替わったが、それが毎月連続開催、計126回で10年半の長きとなった。その間に実に

多彩な方々が話題提供者そしてメンバーに加わってくれた。故田村明さん、新谷洋二さん、陣内秀信さん等々、多士済々の面々との知己はこの勉強会が原点でもある。

その間、日本トイレ協会、道の駅、まちの駅、川の駅、ホープ研究会(地域住宅 HOPE)、Eボートなど立ち上げの際にはいつも声がかかった。事が運ぶと、また新たなアイデア探し、まさに渥美清の「寅さん」の如し、私なりの田中栄治評「産み落としはするが、育てるのは他人任せ、刈り取りもせず」と、まさに「カッコウの托卵」、どう見ても周りのスタッフそして家族の方々は大変だっただろうと心配も。

(3) お台場Eボート防災交流大会

2002年から続く夏の恒例・お台場Eボート大会だが、私も最初から応援団、実は何年か後に裏方は火の車でスタッフの離脱騒ぎ、そこで大学教授の立場から学生達に相談、それに法政大の陣内研、昭和女子大の鶴田研、中央大の山田研なども呼応し、08年より学生実行委員会のサポートが始まった。学生メンバーは毎年替わるが、その前哨戦が7月「川の日」船周遊イベント・下町Eボート探索、そして本番のお台場Eボート防災交流大会、その企画、運営、景品集めの企業巡り、タイムキーパーから実況アナウンス、防災救命実演、表彰式等々を実にうまくこなす。学生みなEボートの魅力に惹かれていったのである。これも田中さんが倒れた後も脈々と続いてきた。それは私が大学から離れた今も、後任や新しい方々が支援し続けてくれている。その間に結ばれたカップルも何組にも及ぶと言う。

惜しむらくは2020年東京オリンピック・パラリンピックの会場準備のため19年から2か年のお台場Eボート大会が休止となること、田中さん天国からその復活をサポートしてくれるかな？

田中栄治さんを偲んで

深津　悦朗（お台場Eボート学生実行委員会）

私は10年ほど前、学生Eボート活動に参加しておりました。河川から風景を眺めたり、お台場Eボート防災交流大会を通じ見ず知らずの人と交流できるプログラムに魅力を感じました。そして、当時の交友関係は未だ継続しております。

活動を創設された田中さんの功績には、感謝すると共に、ご親族の方々や関係の皆様方にお悔やみを申し上げます。田中さんにより発足してきた活動のさらなる発展を、心よりお祈り致します。

田中栄治さんとのご縁に「ありがとう」

大野重男（公益財団法人ハーモニィセンター理事長）

田中さんとのご縁は、まちづくり活動の先達として、町田市長選挙に立候補した、渋谷謙三さん（故人）の応援事務所（自宅）が始まりでした。子供たちにポニーに親しむ子供時代をと、町田にポニークラブを開設したばかりの頃でした。

渋谷さんの選挙の応援に駆け付けた人たちの仕事の分担や進め方を手際よくまとめ、取り仕切っていたのが、田中さんでした。てきぱきさわやか。次々に起こる問題の処理にあたって、問題の本質のありかを見抜き、明るく活路を切り開いていく。優れた人柄・力量のすばらしさに、私は圧倒されておりました。当選は果たせませんでしたが、田中さんと出会い、感動の学びを共にした優れた仲間のパワーは、様々な芽を育み、花を咲かせています。

新橋のサロンの集まりで、様々な分野で活躍しておられる優れた方々との新たな出会いが生まれました。田中さんからEボートの話を聞いて、子供を川で学ばせる素晴らしい活動だと直感し、Eボー

ト連携協会の会長を引き受けました。そのことが、後年の茨城県藤代町に引っ越し、小貝川沿いにポニー牧場を作ることになりました。また、亡くなられた吉川勝秀さんの川と福祉の関わりの研究会が「川での福祉と教育の全国集会」になり、「川に学ぶ体験活動協議会」の誕生につながりました。川・水に関わる、日本中を元気づける活動等は、今も続いています。

山口で倒れられたと聞きましたが、山口から東京に戻られて、元気な田中さんの復活を、楽しみに祈っておりました。願いは叶わず、この世で語りつくせなかったことは、いずれ渋谷さんや吉川さんも一緒に、あの世でゆっくり語り合えることを楽しみに致します。

田中栄治さんを偲んで！！

池中万吏江（MML研究所所長）

田中栄治さん

楽しかった、貴男との思い出が、様々に目に浮かびます。思い起こせば、私が産経の情報紙『リビング』の取材を受け、その時の記者の方が西明記者、そして、その方のお姉さんが「集」の最初のママさん。そこで、西明記者が『集』でパーティーのある日に、ダンスが上手な『ドゥタンク・ダイナックス』の若き小野貴邦社長と美しき奥方真由美さんをご紹介されました。

そして小野さんが、「本当は、田中と中島がいます」と言われ、金曜日のパーティーに誘われました。楽しい神楽坂のラストフライデーパーティーの始まりでした。そこで、五百木邑子さん、『リビング』の編集長や古代食の永山久夫さん、極東石油の副社長河合弘海さん、千葉新聞の記者の皆さん、小野さんから紹介された田中栄治さんは優しいお兄さんの様で、丸い人なつっこいお顔と眼鏡が印象的でした。

それから、伊勢丹の大沢英昭さん、小野さんの友人のダンサー余語パンさん、ダンスの先生横井さん、そして流通部会の広池通彦さんほか、パーティーの度に様々なメンバーを紹介頂きました。いつの間にか週末は独身者のたまり場になり、その中から何組か結婚されました。そんな皆さんの相談役を田中さんに勧められて、何時しか相談コーナーも担当しました。

田中さんは、昔の李香蘭、山口淑子議員が『私、もうその声出ません、代わりに貴女歌って下さい。』と言われた事を知り、よく市町村長会で歌わせて頂きました。

貴男とは数々のボランティアも楽しみました。Eボートにも誘って貰いました。私の研究していた風水にも興味を持って、彼が長生きしたのには、それが役立ったと教えて頂きました。最後にお見舞いした時もパッチリ目を開けて夜来香を聞いて下さいました。田中栄治さん、次の世でも楽しくお過ごし下さい。沢山、沢山修行され、次の世では即、天才にお生まれに成ります！！

沢山沢山、大切な事を研究させて下さり有難う！！

田中仙さん、

長い間ありがとう。あなたのおかげで、田中栄治さんは幸福でした。本当にありがとう。

不思議な人だった　ー田中さんを想うー

宮口侗廸（早稲田大学名誉教授）

田中栄治さんのような不思議な魅力を持つ人には、その後も今までお会いしたことがない。頭はいつも回転していて、思い立ったらすぐに関係者に働きかける。話し方はソフトで、その方向に力を出しそうな人をつかまえ、どちらかというと裏方に回る。初めてお会いしたのがどんな集まりだったか全く記憶がないのだが、地域交流

センターを訪ねて、東京にはこんな人たちがいるのだと、改めて東京という都市の価値を実感した記憶がある。新橋の〈集〉という場所で、地縁・血縁ではない人たちの、いろんなテーマごとの集まりがあることを知り、都市におけるテーマ・コミュニティについて短文を書いたこともあった。またそこで上さんと知り合い、その後、彼の青春であった早大探検部の部長を務めさせてもらったことも不思議な縁である。

そのころ小生は国土審でいわゆる五全総の専門委員会に参加しており、都市から遠い地域には別の戦略が必要と主張して、「多自然居住地域の創造」が四つの戦略の一つとされたのであるが、それと並ぶ戦略として「地域連携軸の展開」が書き込まれた。田中さんは「自分の市町村だけでは達成できないテーマを視野に入れてこそ地域の発展がある」という持論から若手官僚も交えた意見交換会をされていたが、たぶんここから田中発の地域連携軸というものが役所で普遍化されたのだと思う。その後田中さんは『地域連携の技法』という本を出され、居心地のいい社会に変えていくために「社会実験」の提案をされた。

田中さんの話はいつも単刀直入で、富山から毎週早稲田に通っていた小生に、「今晩宿をとるから相談に乗ってくれませんか」などと、時折携帯に電話をもらった。一時は地域交流センターの運営する会社の役員にもしてもらったこともあるが、しかるべき貢献ができたかは疑問である。長い闘病生活の間の失礼をお詫びし、心から冥福を祈らせていただきたい。

栄治さんの弟です、と自己紹介して

田中　信明（盛岡の社会福祉法人いきいき牧場理事）

「田中栄治の弟の、のぶあきです」

栄治さんに誰かを紹介されると、そんな挨拶をしていました。もちろん、ひと呼吸おいて「嘘です。失礼しました」と。

私は、全国紙の記者でした。地方部という部署に所属し、横浜や松本、福島や浦和など、地方支局を転戦していました。栄治さんは、私がどこに転勤しても立ち寄ってくれました。また、地方勤務の合間の東京本社時代には、あちこちと飲みに連れて行ってもらいました。実の弟のようにかわいがってくれました。

出会ったのは、私が35歳、環境庁記者クラブ詰めのときです。前任地・横浜で仲良くしていただいていた森清和さん（「よこはまかわを考える会」の立ち上げ人）の紹介でした。そして、もう一人、私が初任地・盛岡で「兄貴」と慕っていた馬場勝彦さん（「いきいき牧場」創設者）とは、栄治さんは以前からの知り合いだったのです。しかも、三人がそれぞれに仲良しだったのです。驚くというより、ご縁を感じています。

二人は栄治さんより先に逝ってしまいましたが、いま天国で再会し、三人で楽しそうに酒を酌み交わしているのではないかしら――と、私は少々やきもちを焼いています。

キューピーちゃんのような人…田中さん

山﨑祐美子（音楽プロデューサー・元練馬区教育委員）

私が初めて田中さんにお会いしたのは、阪神淡路大震災、中越地震等の中から学ぶ防災のワークショップだったように思います。当時、練馬区ＰＴＡ連合協議会会長職におり、区の防災協議にも参加していました。のちに教育委員の職に就く中でも、益々、地域交流センターとの学びは深くなり、多くの出会いも頂きました。ことに文科省委託事業【新教育開発プログラム】の活動では、田中さんと

一緒にあちこちに旅をさせて頂きました。身体の割に声の大きな人で、言葉も独特な選び方をなさる方だと思っていました。その声から、一つ一つの言葉が心に刺さり、自分の無学を指摘されるようでした。カタイ？場も、柔らかい場も、相手がどんな立場の方であろうと、田中さんの言動には揺るぎがありません。この頃は〈忖度〉などという言葉も耳馴染みない頃でしたが、田中さんにとっては一番忌み嫌う言葉であったでしょう。今の世を怒っているに違いありません。

そんな田中さんに、いったんお酒が入ると、だんだんに赤ら顔になってきて、メガネの奥が曇って、ますます饒舌なります。笑顔がまたいい！その立ち姿は、さながら、キューピーちゃんのよう…と思ったことがあります。酒気帯びながらも、語る言葉は鋭く、酒量が増せば増すほどに、こちらに本音を問いただされます。頭をフル回転させながらついていく、というのが楽しい時間でもありました。

「山崎さんは何やりたい？」と聞かれて、「絵本を創りたい」と言ったら、「いいねえ～、やろう、やろう！」。田中さんと一緒に絵本創りをしたかった…私の唯一の心残りです。

田中栄治さんを偲んで…田中聖人の呪術

千田節子（東京湾岸集合住宅ぼうさいネットワーク）

２００７年１月、江戸川小松川さくらホールで「まちの駅」の交流会があり、私は当時「人生大学」で「まちづくり学科」を学んでいたので、友人に誘われて参加し、そこで田中さんに出会いました。

その交流会はすべての人が不慣れで笑っちゃうくらい不器用でした。もちろん、「かたち」を気にする余りやや的外れな発言にむしろ好感を抱いたくらいでしたが、でも、突然変なおじさんが途中から「だめだめ、もっと本音で言わないと意味がない」などと言い出して、何を思ったかいきなり私を指して「そこのおばさん・・・」と振ってきたのでした。その何か言いたそうな顔を見つける直観力、それに反射的に共鳴してしまったおっちょこちょいが私でした。

それから怒涛のように「みなかみ」との「利根川江戸川上下流フォーラム」や、当時私が関わっていた「防災」関連で「長岡」との交流、「全国川サミットin利根川」、その後「東京湾岸ぼうさいネットワーク」を立ち上げ、全部田中さんの手のひらに乗せられたまま、「川の駅」づくりへ・・・という急流にのみ込まれたのでした。

２００７年に出会ってから、田中さんが倒れた２０１０年までのたった３年の間でしたが、Ｅボートに乗せられ、「もう死ぬな」と何度思ったことか。訳の分からぬまま、言いたいことは全部言いましたが、そういう時は眼を細くして仏様のように笑顔でスルーするのでした。そのあとに「あした自転車で行徳まで行きましょう」という課題が。ところが、行徳から葛飾、江戸川に沿って遂に松戸まで行かされ、行きは向かい風、文句を言うと、「帰りは追い風です」とおっしゃる。ところが、帰りはもっと強い向かい風。しかも何のために江戸川河畔を松戸まで？という疑問には答えず、「世の中にはそういうことがあるんです」と意味不明のお言葉。後日、松戸でのトイレシンポジウムで「こんなおばさんでも江戸川から松戸まで自転車で来られるんです」とうれしそうにぶっていました。

人体実験か、と怒りが沸いてきたものの、この田中さんの呪術にはいまだに謎の力があったと思います。地域交流センターに集まる多くの人々はみなそれぞれ田中聖人の呪術に嵌った特別のオーラを醸していらっしゃったように思いますが、私のような凡人が一生で出会うこともない人々につかの間すれ違って、「日本を良くする」という思いの坩堝をのぞいた鮮烈な印象は何より貴重なものでした。

田中さんが倒れてからも４年ほど「湾岸ネット」は続けましたが、やっぱり私には無理でした。その後、東日本大震災があり、熊本地震があり、各地で台風災害が続き・・・、手元には膨大な資料だけ

が集まり、という状況です。田中さん、もう少しのところだったのに、という悔しい思いは消えません。ご冥福をお祈りいたします。

田中栄治さんを偲ぶ

石田芳弘（元犬山市長）

田中栄治さんと出会ったのは２５年前になるからまわりの状況はぼんやりしてしまったが、栄治さんの表情や話したことははっきり覚えている。

犬山市役所の市長応接室だった。国土交通省でちょっと変わった市長であるという噂を聞いて会いに来たとその人は言い、初めて会った気がしない不思議な印象を持った。あんな理由での出会いは後にも先にも私の人生に存在しなかったが、その後、ちょっと変わった人たちのネットワークである田中人脈に組み込まれていった始まりであった。今から考えるとあの出会いに、融通無碍な自由人、田中栄治さんの人生が象徴されていた。

１９９５年４月、私は犬山市長に就任、直後城下町の道路を拡幅する都市計画を撤回し、古い町並みを残す街づくりを決意した。一度決定した都市計画を撤回するという、時計の針を逆回しするような事例が国土交通省の担当者には話題を提供したのだろう。田中さんは国の官庁と仕事を共有する立場であったが、私の考えに共鳴してくれた。時代はちょうど地方分権が潮流となり中央集権の構図が劇的に変わろうとしていた時であったゆえ、栄治さんとの出会いは百万の味方を得た思いだった。

人生は人と書物と場所の出会いに影響されるという。

栄治さんとの出会いは地方自治の実践を選んだ私の人生に大きな影響をもたらし、かけがえのない敬愛する親友となったし、地域交流センターの人脈はその後の私の仕事の有益な財産となっていった。地方分権の時代が到来したとはいえ、それぞれがバラバラな個でしかない全国自治体を俯瞰し、繋げていく視座は必要だ。また、中央官庁というのは極論すれば省あって国家無しの罠にはまり、全体の政策を考える視座は弱い。その両方の欠陥を補って、橋を架ける役割を民間のシンクタンク地域交流センターとその発想の中心として田中さんが果たしてくれた。当時、地域交流センターのになった役割は時代を拓く画期的なものがあったが、このセンターの存在もすべては田中栄治という一個人の人間的キャラクターからうまれいずるものであったと私は断言してはばからない。

私も政治家人生を４０年近く務めたからいろいろな人に巡り合いお付き合いさせていただいたが、あの田中栄治さんという人物ほど多才で柔軟、千変万化で肩書や固定観念にこだわらない自由人を私は知らない。現場主義に徹し、「現場合わせ！」という栄治さんの口癖が私の耳に残る。

まちの駅、トイレ協会、健康の駅、Ｅボート、日本酒を飲む会等々私は栄治さんの思い付きの発想に大声で笑いながら次から次と付き合い、楽しく自分のまちで市民とともにタナカイズムのまちづくりを実践していった。わが犬山市には〝田中栄治ワールド〟があちらこちらに形跡をとどめている。

地域交流センターが事務局になって「全国首長連携交流会」が発足し全国に多くの友人を得、その延長線上に「提言・実践首長会」が結成され、私が最初の世話役となったりもした。この会は地方分権の中で名を馳せた「戦う知事会」とも連携し、政府に地方の現場主義を提言、地方分権を自治体の首長と住民の言葉で語りあい、時代の扉を開いていった。

今、田中栄治さんを偲ぶとき、私は司馬遼太郎の「竜馬がゆく」、志半ばで暗殺に倒れた坂本龍馬の最後を思い出す。

「天に意志がある。としか、この若者の場合、おもえない。

天が、この国の歴史の混乱を収集するためにこの若者を地上にくだし、その使命が終わった時惜しげもなく天へ召しかえした。この

夜、京の天は雨気が満ち、星がない。しかし、時代は旋回している。若者はその歴史の扉をその手で押し、そして未来へ押しあけた。完」

時代こそ違い倒れかたや年こそ違うが、栄治さんはわれらの龍馬だった。

田中栄治さんの言葉「交流」で育った私

森　民夫（前長岡市長　全国首長連携交流会初代会長　提言・実践首長会初代会長）

田中栄治さんがいつも大切にしていた言葉「交流」は、その後の私の市長としての人生の羅針盤となりました。

田中さんと出会ったのは昭和五十年の半ば、まだ、建設官僚として駆け出しの頃でした。先輩が兎に角面白い人だから会ってみろという言葉に背中を押されて都市小屋「集」の扉を恐る恐る開けました。それから人を動かす様々な田中さんの仕掛の数々、「道の駅の社会実験」、「地域連携軸」、「Eボート」、「明人会」、「日本昆虫倶楽部」、「まちの駅」等々、まさに「目からうろこが落ちる」経験を連続してさせていただきました。

昭和六十三年に建設省から茨城県住宅課長として出向しましたが、その時に、田中栄治さんとのお付き合いがさらに深まりました。HPOE計画の一環で、笠間市を舞台に、「三十六時間シンポジウム」を実施。三十六時間連続で笠間芸者さんを始めとする様々な立場の市民が笠間の良さを語り合うという、田中さんでなくては出来ない画期的なシンポジウムでした。翌年には何と「三百六十度シンポジウム」。あらゆる角度から街づくりを語り合うシンポジウムでした。田中さんは、徹底的な交流を通じて街づくりの合意形成を図る実験が成功したと鼻高々でした。

そうこうしているうちに私は長岡市長に就任。その時の田中栄治さんの言葉、「森さん！霞が関の縦割りと縦割りの間には宝物が転がっているんですよ。だから徹底的に交流することで新しい政策が生まれるんですよ。」という言葉が私の心を鷲掴みにしました。長岡市長として実践した「アオーレ長岡」、「子育ての駅」、「総合支援学校のカリキュラム改革」などの多くの政策は、この田中栄治さんの言葉を応用した結果です。また、Eボート大会も開催して、おおいに楽しませていただきました。

そして、田中栄治さんの「交流」を実践する場として、「首長連携交流会会長」や「提言・実践首長会」の会長を引き受けることとなりました。また、『国の常識は地方の非常識』や『元気な子どもに育てる』などの出版物の編集もお引き受けすることとなりました。その日ごろの積み重ねが、私を全国市長会長にまで押し上げてくれたのだと思います。私が会長に就任した時、田中さんは本当に喜んでくださいました。

この文章を書きながら改めて振り返ってみると、実に貴重で面白い経験をいっぱいさせていただいたことに気が付きました。そんな経験の中で、「交流」という言葉の持つ深い意味を知識として知るのではなく体感として会得できたのだと思います。

田中栄治さんは私の人生の先生でした。本当にいくら感謝しても感謝し足りません。田中栄治さん！ありがとうございました。

田中栄治氏　追悼「集＆ＹＵ」と道の駅

大石久和（国土技術研究センター国土政策研究所長）

田中栄治氏との出会いは、地方建設局（現在の地方整備局）勤務を経て、本省勤務が始まった１９９０年頃だったと記憶する。彼は新橋のサロン「集＆ＹＵ」を拠点に、何から何までと言っていいほど幅広い活動を続けていたが、そこで多くの他省庁や民間、メディア関係の人たちとの出会いの機会を与えてくれたものだった。

そのなかには、経済企画庁の糠谷真平氏もおられ、全国各地の吟醸酒（今日の吟醸酒ブームの先駆けの一人が糠谷氏だったと考えている）を楽しみながら、地方を元気にするためには何をなすべきかなどと語り合ったのも楽しい思い出となっている。

後に国土庁に出向したとき、上司の局長がその糠谷氏だったのは、小生にとっては愉快な驚きであり、糠谷氏の「地域連携」構想で各地を走り回ったことは楽しい思い出となっている。その後、氏は経済企画庁の事務次官となり、退職後は国民生活センター勤務や大学で教えたりしておられたが、最近お亡くなりになったのは極めて残念なことであった。

田中氏は山口県阿武町の出身ということもあって、広島の地域おこし活動に積極的に参加し、当時の中国地方整備局長の岩井國臣氏などとともに「中国地域まちづくり交流会」を開催していた。１９９０年１月の交流会で「道にも駅があって、トイレが設置されてもいいのではないか」との意見が出された。これは、山口県阿東町から参加した船方総合農場を経営する坂本多旦氏からの経験に基づく提案だったと言われている。

ここでの特筆すべき素晴らしさは、参加者が「それなら道路の空き地などを活用して、トイレを置いた道の駅を実験してみよう」と実際に動き始めたことである。参加者は評論家ではなかったのだ。ここでの参加者は全員道の駅の発案者と言えるのである。

その経験を踏まえて、田中氏が道路局に小生を訪ね「観光地で道の駅の社会実験ができないか」と相談されたのである。その趣旨に賛同し、早速、中部地方建設局の高山事務所の松下敏郎所長を紹介したのだった。

松下君は田中氏とともに積極的に動いてくれ、むしろ旗に道の駅と書いた目印を付けたりして社会実験をしたところ、チップトイレに休日には２万円も入ることもわかり、「道路利用者は、道にトイレがある駅のような機能を求めているのではないか」との仮説が実感され、実証もされていったのである。

岐阜県にも中国地方同様に、道の駅発祥を名乗るところがあるのは、このような経緯をたどったからで、その功績は田中氏と松下君に帰属する。

この成功に並行して、田中氏は関東地方で実験できないかと持ちかけてきた。そこで栃木県上三川町の国道４号で実験することとなった。もっとも懸念したのは、交通量の多い４号では、オーバーユースが生じ、道の駅に入ろうとする車が本線にあふれ出してしまうのではないかということだったが、それは杞憂に終わり、ここでも実験は成功した。

こうした経緯を経て、道路局は道の駅の制度化に踏み切ったのである。自動車利用者に対する休憩機能を持った施設は道路局もいくつか模索していたが、決定的に異なるのは道の駅が地元産品を提供したりする「地域からの情報発信」機能を備えていたことだった。

社会実験の当初からトイレという生理機能の充足以外の機能を取り入れた田中氏などの「実験創始者」の発想にはいくら敬意を表しても足りないほどだとの思いが深い。

感謝を込めて、田中栄治氏のご冥福をお祈り申し上げます。

生きることの美を見せてくれた人

松下敏郎（元建設省中部地方建設局高山国道事務所長）

私が田中さんに初めてお会いしたのは、平成３年８月でした。当時、私は旧建設省の高山国道事務所長の職にあり、本省道路局の大石室長の紹介で、「道の駅」の社会実験をやりたいので協力してほしいということでした。

いろいろな人と接した経験から、最初は、俄に信じるにはリスクを感じました。しかし、一方で、この人は何かに動じることはないだろうと感じた、人としての強さに魅了されました。それは、生死

の境を知っている人に共通したものでした。人として完全に自立して誰とでも対等で、媚びることも奢ることも威圧することもなく、物事の核心を突いてぶれることがなく、執着するでもなく淡泊でもなく、自然体の強さが身に付いた人でした。

この人はどんな人生を送ってきたのだろうと思いました。どういう経験をすれば、こんな生き方、人になるのだろうと思いました。俗世を超えたような人が、俗世を変えることに関わり続けていることに、私が手伝えることがあると思いました。

私は到底田中さんのようにはなれません。田中さんも私に期待していたわけではないでしょうが、勝手に田中さんから受けた教えは大事しているつもりです。田中さんに心から敬意を表することはもちろん、心からの感謝と哀悼の意を捧げたいと思います。

田中栄治さんを偲ぶ

谷口博昭（国土技術研究センター理事長・湧志会元会長、元生徒会長）

田中栄治さんとの最初の出会いは、２４年前国土庁調整課長の時です。田中さんはアイデアが湧き出し全国各地の現場を飛び回る行動家であり、第五次全総計画策定の主テーマの「地域連携と交流」に関し精力的な取組をされていました。私も現場こそが価値を創造する大事な場であると賛同し、現場はじめ地域交流センターの日夜の集いに参加することが多い日々でした。

そうした或る日、いつものニコニコを絶やさず少し辛辣な語り口で“地域連携を確固たるものにするには、地域への霞が関の支援が不可欠である。谷口さん宜しく！”とのご下問を戴きました。そこで、地域交流センターの活動に賛同される霞が関有志の課長級で支援組織を形成することにし、会の名称を“志が湧き出る”意の「湧志会」とし幹事長を務めることになった。

また或る夏の日、山口市の或る寺でのワークショップの後「道の駅発祥の地」阿武町での「道の駅」発案者坂本氏を交えての議論を経て、夕刻近く津和野の高津屋伊藤博石堂へ駆け付け「鷺舞」を鑑賞。その後萩へ、夕食後萩焼陶芸家のご自宅での懇談を経て深夜突然田中さんのお姉さんの家にお邪魔して素麺を戴き、ようやく宿へ到達。同室の鳥取の小谷さんと杯を傾けながら長い一日を振り返り、“精力的に取り組んでおられる田中さんの活動をもっと支援しよう”と意気投合、糠谷真平さん（故・元経企庁事務次官）と田中さんのお二人を校長先生に、私が生徒会長、小谷さんが生徒副会長と勝手に決めさせて戴いた。

地域連携は首長の果たす役割が最重要との信念から、田中さんは「全国首長連携交流会」を結成、また「道の駅」に学び仮称「連携センター」や「連携の駅」を経て「まち」の活性化に資する「まちの駅」を創設された。

こうした数々の知見を未交流の全国各地の各層各位に広めることが重要且つ必要という想いで、田中さんと共著で「地域連携がまち、くにを変える～２１世紀をひらく地域からの挑戦～」（１９９８、小学館）を発刊。幾多の議論を重ねた末のこのタイトルに、田中さんの万感の想いが籠っている。私も多くの首長と生の情報や本音の意見交換を重ねつつ想いを共有し信頼関係を築くことが出来、得難い財産となっている。

田中さんは「連携は、上下でなく袴を脱いでの対等の交流が大切、形だけで交流が無いと活性化しない」という想いで、昼の交流会で終わることなく必ずと言っていい程夜の交流会をセットされた。各自持ち込みの銘酒を戴きながら、全員参加の情報や意見交換の司会役を務められた。私が考案した「ヨイショ、三本締め」がお気に入りの様で時々シメのご指名を戴いた。“連携は、良い夫婦の様にパートナーシップ精神で互いを認めシェアし助け合う相互補完関係を築きＷＩＮ＝ＷＩＮの相互互恵関係となることが肝要”と学ばせて戴いた。

新橋「集＆ＹＵ」での交流、「中四（なかよし）さんかいライン」、「５７号に因んでの５・７・５の即席俳句」、Ｅボート等々田中さんからの学びの想い出は尽きない。

余りにも急いで駆け抜けようとして途半ばで倒れられた田中さん、さぞかし残念無念でしょう。しかし、田中さんが残された遺産は数多く偉大で今もこれからも生きています。安らかにお休みください。

合掌！

名人芸

小川富由（住宅保証機構㈱・地域交流センター理事・元国土交通省）

田中さんとの出会いは、１９８０年ころ、私がまだ当時の建設省で住宅局住宅建設課の係長で２０代の最後のころでした。当時の課長だった高橋徹さんから面白い人がいるから話を聞いたらどうかと言われたのではないかと思っています。そのころ、公営住宅の建設事業が伸び悩み、地方自治体のニーズと国が推進する住宅政策との間に乖離があるという認識が強くなっていました。地方自治体に自由に計画を立ててもらい、その中にしっかりと住宅政策を位置付けてもらったらどうかという議論を課内でしており、その延長線でお話を伺ったわけで、その結果はＨＯＰＥ計画という制度に結実しました。今思うと、田中さんは斬新な発想をお持ちで、都市計画といった専門用語で理論武装し専門家が囲い込んでいた分野を「まちづくり」という言葉で解体しオープンにしていくプロセスに大いに影響を与えていただいたと思います。

その後、しばらくして水戸市の都市計画部長で出向していたときにも調査でお世話になりましたが、レポートを作るというよりは、場を作る、人と人とをつなぐという意味で、今でいうワークショップ的なことをお願いしたと思います。田中さんは、縦割りでがんじがらめになっていた官庁間や国と地方の間を、目的・目標を設定していともたやすく人間関係を構築してつないでいくという特技をお持ちだったと思います。建設省に戻ってからも、田中さんからいろいろなアイデアを持ちこまれては、勉強会と称する飲み会の相談に預かる、ということが多かったと思います。こちらも誘われると国会待機の合間を利用して西新橋にあったサロン集に顔を出して、おいしいお酒を楽しませていただきました。また、そこでいろいろな分野の方々とお知り合いになることができたのも自分にとって貴重な財産となったと思っています。

その当時の何故か新潟と水戸を強引に結び付けた北関東地域連携軸構想とか官庁を横断する湧志会、今も続いている首長連携交流会、まちの駅などお手伝いさせていただいた縁で田中さんがお倒れになった後、地域交流センターをお手伝いしています。田中さんの名人芸である、人と人をつなぐ、胸襟を開いて語り合える場をつくるノウハウは、やはり組織として維持するのは難しく、田中の後に田中無し、を実感しています。長い闘病生活の後、帰らぬ人になられたのは残念ですが、心からご冥福をお祈りいたします。

田中栄治さんにいただいたもの

樽見英樹（厚生労働省　保険局長）

地域交流センターの４０周年記念誌にも書いたことですが、私の田中さんとの最初の出会いはまだ２０歳の学生の頃、新橋の「集」でのこと。しかしそのあと「集」ともしばらく疎遠になってしまって、２０年後に思いがけず現れた田中さんは昔と変わらぬ田中栄治さんでした。その頃私は厚生省で発足当初の介護保険制度を担当し、全国の自治体と国の橋渡しのような仕事をしていて、首長会のシン

ポジウムか何かに出ることになり、田中さんとお話をする機会を得たのでした。

昔「幻の日本酒を飲む会」でご一緒していました、と言うと、田中さんは突き放したように「へー」と言い、「まあ、また楽しくやりましょう」という、言葉は違ったかもしれませんが、そういう趣旨のことを言われました。それから改めて、提言・実践首長会とか健康の駅の活動とかで田中さんと文字通り楽しくご一緒することになったのです。

そんなおつきあいでしたし私はいつまでたっても田中さんからすると若造だったと思いますので、その範囲での私の印象にとどまりますが、様々な人の様々な意見を取りまとめる際の絶妙の（ご本人はきっといい加減、と言われると思いますが）距離感。人懐こい笑顔を浮かべながら、時には意外な人の発言を求め、また意外な意見を面白がる。まとめる方向性は常に前向き。といったことが、田中さんの変わらぬ不思議な魅力の要素であったように思います。

考えてみれば、みんなこの世をより良くしようと思っているという、人の善意への信念とでも言うべきものがその底にはあったのではないかと思うのです。公共政策に関わる者のはしくれとして、また社会の一員として、そうした思いを私も持ち続けたいと思っています。

追悼メッセージ

逢坂誠二（衆議院議員・元ニセコ町長）

四半世紀も前、田中栄治さんと初めて会った。島根県だったと思う。初対面にもかかわらずハッキリ、ズケズケと話す田中さんの第一印象は、正直、悪い。

田中さんとの付き合いのハイライトは、平成の大合併に対する政府への提言だった。全国の首長有志が議論し、提言・実践首長会として、官邸で官房長官に直接、提言書を手渡した。その提言が平成の大合併に採用された。あの経験がその後の私の様々な取り組みの原動力になっている。

田中さんとの関係は語り尽くせないが、私の政治家としての大きな支柱であったことは間違いがない。

語り合う会に参加できず残念に思うが、田中さんなら、きっと私に対して「具体的な仕事をしろ」と叱責するに違いない。合掌。

「手をつなごう北関東３００人交流会」の思い出

古池　弘隆（宇都宮大学名誉教授・宇都宮共和大学特任教授）

北関東自動車道は、茨城県・栃木県・群馬県の県庁所在地を東京から約１００キロのところで環状につなぐ全長１５０㎞の高速道路です。平成５年に建設工事が始まりました。同じ年に国土庁が五全総策定に向けて行なった１２の地域連携軸構想の一部をなしています。その頃、東京に向かっては常磐道、東北道、関越道という３本の放射状の高速道路がつくられていましたが、横の道路は国道５０号という細いものしかなく、また鉄道も水戸線・両毛線という単線だけで、３県間の交通は大変不便でした。北関東自動車道が完成すれば前橋市と水戸市の間の所要時間は４時間半から２時間に短縮され、その結果北関東３県の地域連携が進展し、東京を中心とした一極集中、ピラミッド型の国土構造が変わるさきがけになるものと期待が高まっていました。

その北関東自動車道の建設促進に向けて、茨城、栃木、群馬の３県の国道事務所の所長と３県の大学の教員が集まって、勉強会がつくられました。工事が始まってからは日本道路公団の３県の所長も

加わり、三々研究会と名づけられました。田中栄治さんはその事務局長を務められ、地域連携の必要性について中心となって議論をリードされました。

最初の頃は官と学でやっていたのですが、せっかく新設する高速道路を最大限活用する仕組みをつくることが必要ではないかということになりました。実際に使うのは住民であり、地元の民間企業なわけですから、より有効に活用する仕組みを考えるために、田中さんの発案で各県の様々な分野から100人ずつの有志を集めて、「手をつなごう北関東300人交流会」を組織しました。この長い名称はもちろん田中さんの命名です。私は初代会長でした高崎経済大学の横島庄治先生、2代目の茨城大学の山形耕一先生の後を受けて、3代目の会長を務めさせていただき、平成9年から年に1回各県持ち回りでフォーラムを開催してきました。

北関東自動車道はもともと北関東の内陸都市を常陸那珂港と高速道路で直結するための物流が中心になるという認識がありましたが、その後の時代変化を踏まえて、観光、医療、健康、レクリエーション活動等、多様な使い方を考える必要があるというふうに議論が進みました。300人交流会では平成13年からの「北関東うみ・やま交流フェア」をはじめ、住民やNPOなどが参加して様々な活動を行ってきました。平成18年3月には3県の医療系大学や病院が集まり、北関東道メディカルハイウェイ構想シンポジウムが開催されました。このようにして北関東自動車道を軸に、一体感のある北関東交流文化圏を形成するための合意形成および仕掛けづくりが進められてきました。

この活動のもう一つの柱となったのが、これも田中さんが始められた「まちの駅」の北関東での展開です。平成17年頃には北関東3県では、300人交流会が中心となって200箇所を超える「まちの駅」ができていました。とりわけ栃木県鹿沼市では100箇所を超える「まちの駅」ができ、全国でも最多となっています。

北関東自動車道は平成23年3月19日に全線の開通式を予定していましたが、その1週間前に発生した東日本大震災では、被災者の避難や救援に活用され、命を結ぶ高速道路として現在に至っています。

その前年の正月に倒れられた田中栄治さんに北関東自動車道の完成後の地域連携の成果や「まちの駅」の賑わいを見ていただけなかったのは残念ですが、その功績は私たち関係者の間でずっと引き継がれ、これからも語り継がれていくことでしょう。

田中さんを偲んで

関口眞作（NPO法人高崎やる気堂理事長）

私が四十数年前に「GUNMA街からの通信」地元のミニコミ誌を発行していた時代、田中さんから突然連絡を頂き会うことになりました。その当時、田中さんとは一度も面識もありませんでしたが、一度会いませんかと言う事でした。「道の駅」と言うモノをこれから創ると言う事でした。現在の国土交通省が当時は建設省と言う時代でした。

第一回目の会議が確か新潟の湯沢で行われた記憶があります。あの当時田中さんに連れられて、色々な方々を紹介していただきました。驚いたことに、ほとんど全国の首長と知り合いというこの人はいったい何者？？？？

それから、Eボートや健康街道など色々なお手伝いをさせて頂き大変勉強になりました。その後、田中さんみたいな方と未だにお会いすることはありません。

（沢山の思い出がありすぎて書ききれません）……合　掌

田中さんと一緒に仕事したこと

上　幸雄（元・地域交流センター事務局長、ＮＰＯ法人日本トイレ研究所理事、山はみんなの宝クラブ代表）

田中さんは若い人との付き合いも、新しいテーマで活動する時も、気分が乗ると、トコトンのめり込むし、飽きが来るとさっさと手を引いてしまうところがあった。私とは、そのどちらでもなく、テキトウだったような気がする。私にとっては、いちいち指示が出ることもなく、テキトウに任せてくれて、ありがたかった。

私は出版をやるという約束で、地域交流センターの仲間に入り、「日本のごみ処理」、「廃乾電池対策」、「市民参加の川づくり」、「トイレの研究」などを本にしたが、もっとも印象に残ったのは「ザ・モデル事業」（１９９０年刊）だ。田中さんとの話の中で、“どうも最近、各省庁が新規事業を立ち上げる際、モデル事業という手法をとっているようだ”と、話が一致した。省庁を取材すると予測通りだった。

「ザ・モデル事業」は増刷し、続編も出た。本ができた時、田中さんが珍しく食事に誘ってくれた。余程、うれしかったのだろう。でも、田中さんは食べることにはあまり執着しない。淡泊だった。ある時、夜遅くまで頑張る新入りスタッフに食事をごちそうすると誘った。新入りは喜んでついていったが、行ったところは「立ち喰いそば屋」だった。田中さんの名誉のために言っておくが、いつも立ち喰いそば屋ばかりでない。若いスタッフを連れて、焼肉屋とか寿司屋にも行っていた。

もう一つ印象に残っているのは、興に乗ると我を忘れてしゃべりまくる、という癖もあった。伊那谷の地域づくりで活動している時、同じ“長谷”が付くというこじつけから、長谷村（現在は伊那市）のむらづくりを手伝ってほしいと、当時、気鋭の登山家で鳴らした長谷川恒夫さんに依頼するために、赤坂で３人で飲んだことがある。

その時も、田中さんは一人でしゃべりまくり、長谷川さんと私は、アーとかウーとかいうばかり、私はとうとう我慢しきれず中座し、そのまま帰ってしまった。長谷川さんはわずかに話した中で、“私はいずれ山で死ぬだろう。しかもそんなに先でないと思う”と言っていた。その数年後、長谷川さんは、ハセツネカップに名を残し、山で死んだ。

そして今、田中さんも蒼穹の彼方へと旅立った。二人はヤ―久し振り、とおしゃべりを楽しんでいることだろう。　お二人のご冥福を祈ります。

田中さんからのいただきもの

林美栄子（わいわいコミュニティ・たまがわ／たまがわ いち・にい・さん代表）

２０００年を過ぎて、私自身が子育てと仕事の毎日になるなか、縁あって子育て支援のＮＰＯの立ち上げに関わり港区との協働で子育て支援施設運営を開始しました。その事業は多額の補助金で運営されていましたが、使途について団体本部との意見の相違がどうにもならず、日常運営を継続しながら困難な状況をすり抜けて分離独立をする必要が生じました。私は８０年代から仕事とＮＧＯのボランティアが日常でしたが、市民のまっとうな思いに支えられたＮＰＯしか知らず経験の未熟さに打ちのめされる感覚でした。そこで田中さんに助けを求め、心持ちの大事さと具体的なアドバイスや選択肢を頂戴し、大日向代表と共に大いに支えられました。

現場は強い。代表は風格を。気になることは多々あれどいちいち動じない。大丈夫、と事例を説きつつ灯りをともす作業をしてくださいました。そのおかげで区の信頼を損ねることなく新たなＮＰＯを立ち上げ、田中さんにも監事をお引き受けいただきました。その

間一日も休むことなく運営団体の変更を行えましたし、この事業は現在も続いています。

私はその後子どもの近くで仕事をしたいという思いで２００７年に二子玉川で起業し、その傍ら仲間と地域の多世代交流カフェを月２回開き１２年。１０年目の春に世田谷区のおでかけひろば事業として常設の子育てひろばを開設しました。多世代で一緒に食事を作って楽しく食べる「おなかまめし（同じ釜の飯）」活動と、ひろばでの毎日の食事作り。私たちなりの誰もが住みやすいまちづくりを目指して活動中。まだ道半ばです。源流は私の育った実家での人交流ですが、成人後に田中さんと大勢の皆さんの交流が社会問題の解決につながっていく様を見せていただいたことは大いなる礎になりました。２００８年には「学び合い、支えあい」地域活性化事業にも参画させていただき、世田谷で中高生と共に居場所や大人との交流を考えるプロジェクトを実施し彼らのその後の活動に大いに活かされました。

にこにこ笑顔の田中さん。「みえこちゃん、飲み屋をやるのが一番だよ。そこでいろんな人や意見が立場に関係なく出てくればね、いろんなことの解決の糸口は見つかっていくんだよ」。私は時々その言葉を思い出しながら、一生を通じて人交流の世話係でいたいと思っています。田中さんと出会い、薫陶を受けられたことに、深く感謝するばかりです。

「丁稚奉公」から西サモア、そして教育問題へ

吉田新一郎（プロジェクト・ワークショップ・元「世界を語る会」世話人アシスタント）

私と田中さんとの出会いは、当時野村総研にいた米村洋一さんに「おまえにピッタリの会がある」と、当時神楽坂にあった「集」の集まりの一つ「世界を語る会」に連れて行ってもらったのがきっかけでした。その世話人の井上一郎さんにはその後いろいろと世話になり、一時は彼のアシスタントのようなこともさせてもらいました。

その後、田中さんのアプローチを学ばせてもらいたいという思いが強まり、一九八一年には田中さん個人の「丁稚奉公」をさせてもらいました。主に関わったのは京都での空き缶追跡調査でした。（その当時京大生としてアルバイトで手伝ってくれた一人が現副所長の佐久間さんです！）

田中さん（および当時のダイナックスの職員の方々）には、「集」や「地域交流センター」そして「Ｄｏ　Ｔａｎｋ　Ｄｙｎａｘ」を通して、ヒトとのかかわり方、仕事の作り方、仕事の進め方等、たくさんのことを教えてもらい、感謝しています。

その年の晩秋に、たまたま『パパラギ』という本を読んでしまったことが、私の海外放浪癖を再びもたげさせてしまい、丁稚奉公を予定よりも早めに切り上げて、西サモアを目指しての太平洋を島伝いに巡る半年の旅に出させることになってしまいました。当時、まちづくりや環境問題と途上国援助の狭間で、私自身が揺らいでいたからです。

これら＋教育問題には、田中さんの考えやアプローチを引き継ぐ形で私なりに引きずり続けているつもりです。興味のある方は、『ムラの未来、ヒトの未来』『遊びが学びに欠かせないわけ』および『ギヴァー』（ないし「ギヴァーの会」のブログ）を読んでみてください。

単語記憶カードで「人」を勉強していた田中さん

佐久間　信一（（株）ダイナックス都市環境研究所副所長）

「アルバイトやらないか」。大学一年の冬、クラスメイトに声をかけられ、私は空き缶拾いのアルバイトをすることになった。今から四十年以上前のことである。クラスメイトは田中さんの甥、京都で

の空き缶ポイ捨て実態調査のアルバイトである。当時、京都市では、「空き缶のポイ捨て防止条例」の議論の真っ最中で、大きな社会的関心事となっていた。

議論は議論として、実態把握を田中さんの会社（(株)ドウタンク・ダイナックス）が行っていたのである。自販機ごとに缶の裏に決まった色のシールを貼り、ポイ捨て缶の分布を調べるなど、いろいろな調査を実施した。時間があって喫茶店で休憩していると、田中さんは「単語暗記用のカード」（表に英語、裏に日本語訳を書いて単語を覚えるもの）を一束取り出し、ぶつぶつ言い始めた。「へー英語の勉強しているんだ。」と思ったら、表に人の名前、裏にいろいろ細かなことが書いてあった。私はそんなアルバイトを三年間行った。

縁あって、大学卒業後五年経って、またもや田中さんの会社にお世話になった。その頃田中さんは、空き缶問題等環境問題を行うダイナックスの活動にはほとんど関わらず、地域交流センターの活動に専念していた。入社が決まった頃、田中さんの机には例の「単語暗記カード」が何束もあった。一束百人としても十束ではきかなかったように思う。

田中さんの本領発揮の場面がパネルディスカッションである。田中さんは、必ずコーディネーターを務め、そして必ず参加者名簿を手にしていた。会も終盤を迎えると、必ず「会場からも発言してもらいましょう。」（そして、参加名簿を見ながら、）「本日は〇〇さんが参加していますね、〇〇さんどうでしたか」。〇〇氏は、田中さんの意をきちんと理解しての発言）。

田中さんが進めるシンポジウムは、会場全体が演劇の舞台のように思えた時がある。参加者名簿を見ながら、その場で配役を決め、即興で舞台を進めるのだ。「単語記憶カード」で日頃から人について「勉強」していた成果がこれなのだ。

一生ものの〝ものさし〟

明石　あおい（(株)ワールドリー・デザイン代表取締役／地域交流センター理事）

社会に出て、初めて入った会社の代表が田中栄治さんだった。田中さんは、良くも悪くも私の〝仕事観〟に多くの影響を与えた…というより、〝仕事観〟そのものを作った人だった。

就活もせず大卒後もぷらぷらしていた私を、田中さんが採用してくれた。口癖は「いい加減が良い加減」で、一見〝ゆるい〟感じの人。でも、仕事に関しては、人に気づかれないくらい速くたくさんのことを「忍者のようにやれ」という厳しい面もあった。以来、議事録は会議を進行しながら仕上げるものとなり、一つの行動でいかに多くの影響や成果を得られるかを常に考えるようになった。また、瞬発的に本質を突く話をされるので、社会の動きにアンテナを貼りながら常に自分なりの哲学を持つという基本姿勢みたいなものを〝植え付けてもらった〟ように思う。

田中さんは、総理大臣から通りすがりの人まで、分け隔てなく自然体で話しかける。水と油でドレッシングを作るみたいな気軽さと手際の良さで、人と人を出会わせ、何げない雑談から新しい事業やしくみを作ってきた。視点がくるくる変わってつかみどころがなく、状況が急展開するので、未熟な私には理解不能で毎日が大混乱だった。気ばかりが強かった私は「交流なんて傷のなめ合いじゃないか」とか「連携の仕組みを作っても継続的な事業計画がないとダメ」とか「そもそも社員の定着率や満足度が低い」とか言って、よく突っかかっていた。そんな時、田中さんは決まって「世界平和」を口にした。でも、当時の私には生ぬるい逃げの回答にしか見えなかった。

今になって思えば、実に純粋で誠実な姿勢ではないか。どんな人も大切な資源だからこそ、様々な人に会い、思いを知り、尊重し、つながり合うことでしか、社会は変えられない。田中さんの言動はすべて世界平和のための〝究極の草の根運動〟だったのだと。

経営者となった今、気づくことは、未知で理解不能なことにいっぱい挑戦させてくれた田中さんの器の大きさだ。めいっぱい胸を借りて、めいっぱい自分の疑問や葛藤をぶつけさせてもらったと思う。若い私の見えないところで限りなくフォローをしてくれていたに違いない。また、改めて、私の一生をかけても、人への関心と愛着の強さは、田中さんに勝てないなと思う。

地元・富山へのUターンについては、田中さんが倒れる前に伝えていたことだった。「今度は自分が地域の一員として社会を変える」という思いだった。でも、田中さんが倒れた直後は、正直、Uターンをやめようかとも思った。しかし、自分で考えて行動し結果を出すことが、結局、一番の〝田中さん孝行〟なんじゃないかと思い至った。いつかむっくり起き上がって「おお、富山で面白いことしてるね」と言ってもらいたかったけれど、残念ながら叶わなかった。

最近、アリババの創業者であるジャック・マー氏のある言葉を見つけた。"Before 30 years old、 follow somebody. Go to a small company. Normally in a big company、 it's good to learn processing. You are part of a big machine. But when you go to a small company、 you learn the passion. You learn the dreams. You learn how to do a lot of things at one time. So、 before 30 years old、 It's not which company you go、 it's which boss you follow. It's very important. A good boss will teach you a differently." — Jack Ma、 the founder of Alibaba（三十歳以下は、信頼できるボスがいる小さな会社に行け。そこで情熱、夢、一度に色んなことを学べ。大切なのはどの会社に入るかではなく、どのボスについて行くかだ。良いボスはあなたを大きく変える。—ジャック・マー／アリババ創業者）

社会を見る〝ものさし〟は、良くも悪くも、初めて入った会社で作られる。田中さんがくれた〝ものさし〟は、ちょっと不格好で偏っているけれど、私の一生ものだ。

時代の先覚者田中栄治

中瀬勝義（地域交流センター理事）

改めて田中栄治さんのすばらしさを強く感じている。

橋本代表に同行し霞が関に行くことは、私一人では全くあり得ないチャンスだ。農林水産省のリーダー格の方にお会いし、「農林水産省こそが持続可能社会のリーダーであるべきだ。工業貿易立国こそが日本再生の一番近道というのは可笑しいのではないか。自動車や電気製品の輸出より農林水産業が最も大切ではないか」等と私の勝手な意見を丁寧に聞いて頂けることがある。そんなことを聞いて頂ける機会は、田中栄治さんの努力の積み上げで育てた「地域交流センター」として面会できるからだと思う。

田中栄治さんに会ったのは、約２５年前、広島県竹原市だった。岡本守生さんの「瀬戸内海クラブ」の講演会だった。中国電力上関原発環境調査リーダーとして赴任していた時に、こんな会合があるので参加してみませんかというＦＡＸが入ったのがきっかけだった。講演後、船で大崎上島に移動して楽しい交流会に参加した。単身赴任で土日を持て余していた身には貴重な場だった。大崎上島の山の上から瀬戸内海を見ると「瀬戸の花嫁」があまりにもピッタリ来た。この素晴らしい自然と豊かな時間を大切にしたいと思った。

日本ほど温暖で、水が豊富で、緑が多く、周囲を海に囲まれた自然豊かな国、世界一素敵な国はないと考えている。この自然豊かな国を「海洋観光立国」にして、外国から長期バカンスを活用して、遊びに来て欲しいと思う。田中さんの「海交流」に通じる素晴らしい国の在り方と考えている。

「資源のない国」から「自然豊かな国」を夢見て！

田中さんとの9年2か月

橋本正法（NPO地域交流センター代表理事）

平成22年1月3日午後8時過ぎ、実家でくつろいでいる時に携帯電話の着信音が鳴った。画面には「田中栄治」と表示されている。正月早々何だろうと訝しげに耳に当てると、電話の声は田中さんの奥さんで、「主人が萩で倒れて、そのまま葬式になるかもしれません」と言う。親戚の葬儀で帰省すると聞いていたので、「親戚の方の葬式ではなく、田中さんが自分の葬式に出ると言うことですか？」と、仰天のあまりトンチンカンな受け答えをしてしまった。

年明けから「広域共助」をテーマにした大きなプロジェクトが始まるため、田中さんは5日にキーパーソンによる会議を予定していた。本プロジェクトにかける田中さんの思いは強かったので、離脱する無念さを察すると、今も心が痛む。スタッフは4日の午後事務所に集まり、対応策を話し合った。田中さんのご家族と連絡を取り、一命は取り留めたという連絡に安どするとともに、司令塔を失ったプロジェクトの波に飲まれる怒涛の3ヶ月間が始まった。

出来栄えはともかく、何とかプロジェクトが一段落したところで、4月中旬に同僚の明石博行君と萩市の田中さんをお見舞いに行った。ベッドに横たわっていた田中さんは、手足を動かすことは出来ても声を出すことも起き上がることも出来ず、とは言え顔の表情や頷きから、誰が来たかを理解していることは明らかだった。主治医からは、ここまでの回復ぶりから車いすでの生活も望めるという説明があり、喜んで車いすを押してあげたいという思いを抱いて東京に戻った。

新年度が始まり、主人を失った地域交流センターグループはいろいろと混乱が顕在化した。「株式会社地域交流センター企画」は、田中さんとの話し合いで明石君が社長を引き継ぐことが決まっており、地方移転を模索していた。NPOは7月に理事会を開いて、私が代表理事に就くことが決まった。力不足は自他ともに認めるところではあったが、その時点では田中さんが車いすででも復帰する可能性を信じていたので、「中継ぎ投手」ということで引き受けることにした。都市小屋「集＆YU」は地域交流センターの混乱の影響も受け、赤字が膨らんだために10月末でいったん閉店。しかし、久武経夫さんの強い思い、「田中さんが帰ってきた時に集がないと寂しがるだろう」という考えから、体制をスリム化して12月の忘年会シーズンに集を再開させた。その後「被災地のお酒を飲む会」や「日中友好サロン」などの新しい会を立ち上げたが、経営的な厳しさは改善せず、平成26年に40周年交流会を開いたものの、翌27年5月末、ついに41年の歴史に幕を下ろした。

田中さんは、原口義座先生のご尽力で平成22年11月に東京のリハビリ病院に転院し、本格的なリハビリを始めた。田中さんなら、という奇跡的な回復を期待していたが、3ヶ月の綿密なリハビリは奏功することなく、身体機能は戻らないまま療養病院に転院することとなった。

お見舞いに行っても会話が出来ないので、お顔を見て一方的に話しかけるしかできなかったが、話をしていると田中さんが涙を流すこともあった。いろいろな方が田中さんを心配して連絡をくださるので、その方々をお連れして年に3～4回は病院を訪ねた。田中さんの後を引き継いで、全国首長連携交流会やまちの駅連絡協議会、お台場Eボート大会等の運営をする中では苦しい場面も多々生じたが、田中さんの顔を見に行くことで心が安らぐ気持ちになれた。覚悟はしていたつもりでも、亡くなられたことの喪失感は少なくない。入院中の9年2か月も支えてもらっていたことを実感し、あらためて感謝の気持ちが湧いている。

通信欄より

田中さんは、いつも現状を正しく把握し、その上で理想に向かって進む姿勢でした。長いお付き合いでした。当日は出席できませが、皆さまのご健勝を祈ります。

森　真（元各務原市長）

田中栄治様がご逝去されましたこと、これまで存じ上げず、心からご冥福をお祈り申し上げる次第です。また、生前にいただきましたご厚情にあらためてお礼申し上げますとともに、数々のご功績に敬意を表する次第です。残念ながら今回は前々からの約束のため参画できませんが、遠方よりお悔み申し上げております。皆さまにもよろしくお伝えいただければと存じます。

三浦　真紀（元国土交通省道路局）

平成１２年民間第１号の「まちの駅たかおか」が誕生して１９年、年号も「令和」になりましたが、田中さんの尊い志を引継ぎ、それぞれの街、町で活躍しましょう。田中さんには大変お世話になりました。「合掌」

伏江　努（まちの駅ネットワーク高岡）

神楽坂の「都市小屋・集」発足以来のお付き合いでした。発想の豊かさと機知の巧みさにいつも感心していました。もっともっと一緒に語り合いたかった。誠に惜しみて余りある逸材でした。残念です。後世に語るため、田中栄治賞（地域交流貢献）の制定を！！

村山　友宏（ＮＰＯ法人グローバル・コロキウム代表）

田中栄治さんには親しくしていただいたのに、長期にわたる闘病生活を余儀なくされ、お気の毒でした。ご冥福をお祈り致します。

丸山　亮（流行歌どこまで聞ける会世話人）

田中栄治先生が地域活性化に貢献された功績には今さらながら敬服しております。平成１９年にゼミで「まちの駅」をテーマに取り上げたところ、早速有益なアドバイスをいただいたのが昨日のことのように思い出されます。これからも、微力ながら「まちの駅」の発展に貢献したいと考えております。ご冥福をお祈りいたします。

鯉江　康正（長岡大学副学長）

「日本ぐるっと一周・海交流」の続きの海洋観光はようやく瀬戸内海で形に見えてきました。「ぼうさい朝市ネットワーク」も東日本大震災で力を発揮しました。どちらも田中さんと連携してやりたかったプロジェクトです。

藤村　望洋（ぼうさい朝市ネットワーク）

当日、仕事のため出席できず大変残念です。田中さんのご逝去をお悔やみ ご冥福をお祈り申し上げます。

阿部　辰数（元・建設省江戸川工事事務所）

２０年前に国際交流の話をした時、「自分も考えている、一緒に出来るといいね」と言われ、橋本氏をサポートに付けてもらったことで、「生命の碧い星」が動き始めました。田中さんには「勇気」と「行動」と「実践力」を学びました。ご冥福をお祈りいたします。

松崎修明（ＮＧＯ生命の碧い星理事会代表理事）

田中栄治年表（未完成）			
年	月	事がら	日本・世界の動き
1943	10 月	山口県阿武町で生まれる	
1962	3 月	山口県立萩商業高校卒業	
	4 月	丸紅株式会社入社	
1964	4 月	慶應大学経済学部入学、ウエイトリフティング部に入部 ※在学中に公認会計士補（当時）に合格	東京オリンピック
1968	3 月	慶應大学経済学部卒業	
		監査法人・森下会計事務所に勤務	
1970		昭和シェル石油株式会社に入社	
1972		※カンコロジープロジェクト	
1973		公認会計士資格取得	
	12 月	㈱ドゥタンク・ダイナックスの設立メンバーとして参画	
1974	5 月	サロン集を神楽坂にオープン　※記念講演は友永剛太郎氏	田中首相金脈問題で辞職
	7 月	集：ゴミニティがスタート	戦後初のマイナス成長
1975	12 月	集：幻の日本酒を飲む会がスタート	沖縄海洋博
1976	4 月	集：廃棄物行政研究会（地域交流センターの前身）がスタート	ロッキード事件発覚
1977	1 月	集：世界を語る会がスタート	
1980	9 月	ドゥタンク・ダイナックス環境問題研究部が新橋に移転	モスクワオリンピック不参加
	11 月	サロン集、神楽坂から新橋に移転　※記念講演は下河辺淳氏	
1981	4 月	地域交流センターを正式に発足、代表となる	
1983		第 1 回全国河川シンポジウム（草加市）※以後、3 回開催	青函トンネル開通
1984		空き缶散乱実態調査（京都）	
		トイレット研究会（トイレットピアの会）がスタート	
	10 月	㈱ダイナックス都市環境研究所発足、山本氏と共同代表取締役	
	11 月	『河川再生と市民参加』を出版	
		『日本のごみ処理−実践する都市 134 事例−』を出版	
1985	6 月	モデル事業シンポジウムを開催（東京都）	つくば万博
	8 月	『−河川シンポジウムからの提言−　都市河川を知る』を出版	
	11 月	都市小屋YUを新橋にオープン　※記念講演は田村明氏	
		『ザ・モデル事業出版』を出版	
1986	2 月	日本トイレ協会　第 1 回トイレの日シンポジウム（伊東市）	伊豆大島噴火
	9 月	第 1 回地域づくり政策交流シンポジウム（東京都）	
		第 1 回九州河川シンポジウム（久留米市）　※以後、3 回開催	
		『続ザ・モデル事業出版』を出版	
		『東京の川　川から都市を考える』を出版	
1987	2 月	笠間 HOPE 計画 36 時間シンポジウム（茨城県笠間市）	「連合」発足
	3 月	伊那 36 時間連続シンポジウム（伊奈谷周辺地域）	JR6 社発足
		第 2 回九州河川シンポジウムを開催（大分市）	
		『九州の川　河川とまちづくりの調和を目指して』を出版	
1988	6 月	第 2 回地域づくり政策交流シンポジウム（東京都）	瀬戸大橋開通

年	月	事がら	日本・世界の動き
	7月	四国八十八時間シンポジウム	
		第3回九州河川シンポジウムを開催(北九州市)	
1989		第4回九州河川シンポジウムを開催(宮崎市)	平成に改元
	10月	インフラックス研究会発足	
		『川から発想するまち』を出版	
1990	1月	中国地域まちづくり交流会シンポジウム(広島) ※この時に、坂本多旦さんが「道路にも駅を」という提案をした	東西ドイツ統一
	2月	『日本昆虫倶楽部　まちづくり　ポストモダン、生き物』を出版	
	6月	宮島シンポ＆交流会(一泊二日の合宿方式、60の分科会)	
	7月	ダム・ウォータースポーツ協議会発足	
	9月	中国・地域づくり交流会発足(広島県)	
	11月	中国地区リレーシンポジウム(倉吉市、松江市、萩市、ほか)	
1991		道の駅社会実験(山口、岐阜)	バブル崩壊
	2月	ダム水源地交流協議会発足会を開催(東京都)	湾岸戦争勃発
	2月	『いま、中国地域が動く』を出版	
	6月	日本エコライフセンター設立	ソ連邦消滅
	8月	第1回ダムウォータースポーツフェスティバル(大竹市)	
	9月	第1回環境広告コンクール(東京都)	
	11月	『21世紀のくにづくりを考える』を出版	
1992		第1回国際トイレシンポジウム(神戸市)	PKO協力法
	7月	道の駅社会実験(山口、岐阜、栃木)	
	9月	第1回全国水環境交流会(埼玉県草加市)	
1993	4月	TAMAらいふ21(多摩東京移管100周年記念事業)に参画	
1994	5月	サロン集20周年記念交流会	
	8月	第4回ダムウォータースポーツフェスティバル(岩手県東和町)	村山内閣成立
	9月	第2回全国水環境交流会(千葉県柏市)	
	11月	第4回環境広告コンクール(東京都)	
1995		Eボートの開発を始める	阪神淡路大震災
	7月	第1回中国四国交流連携倶楽部(岡山市)	
	7月	Eボート進水式(多摩川)	
	8月	第5回ダムウォータースポーツフェスティバル(愛媛県肱川町) ※Eボートを使った初のボート大会	
1996	5月	INFRAX研究会「次全総に向けての提案と仕組みづくり」	薬害エイズ訴訟和解
	5月	『地域連携の技法』を出版	
	8月	第6回ダムウォータースポーツフェスティバル(宮川村・河合村)	
	10月	地域交流センター20周年記念交流会 ※この時に、首長連携交流会の発足を提案する	
	12月	INFRAX研究会「流域連携の哲学と実践」	
	12月	全国Eボート連携協会発足	
1997	4月	全国首長連携交流会正式発足	

年	月	事がら	日本・世界の動き
	4 月	第 1 回地域づくり明人会（東京都）	
	10 月	第 1 回全国 E ボート交流大会（多摩川）	
1998	7 月	介護保険制度と福祉政策を考える首長フォーラム（全 4 回）	
	11 月	全国首長連携交流会主催「くにづくりフォーラム」（東京都）	
	11 月	『地域連携がまち・くにを変える』を出版	
1999	5 月	第 4 回全国首長連携交流会（船橋市）※初の合宿形式	国歌・国旗法成立
	9 月	第 3 回 全国 E ボート交流大会（岩手県川崎村：北上川）	
2000	2 月	全国市町村川交流会シンポジウム（東京都）	三宅島噴火
	2 月	特定非営利活動法人 地域交流センター設立	沖縄サミット開催
	5 月	第 5 回全国首長連携交流会（犬山市、各務原市）	
	8 月	「まちの駅連絡協議会」正式発足会＆フォーラムを開催（東京）	
	9 月	第 8 回全国水環境交流会（新潟市）	
2001	5 月	第 6 回全国首長連携交流会（東京都武蔵野市）	中央省庁再編
	8 月	第 1 回「まちの駅」全国フォーラムを開催（東京都）	アメリカ同時多発テロ発生
	11 月	第 9 回全国水環境交流会（福岡県久留米市）	
2002		日本ぐるっと一周・海交流（1 年目）	欧州通貨統一
	3 月	第 2 回「まちの駅」全国フォーラムを開催（山梨県櫛形町）	田中耕一ノーベル化学賞
	5 月	第 7 回全国首長連携交流会（新潟県長岡市、柏崎市）	学校週 5 日制
	7 月	第 1 回お台場Eボート交流大会	
	8 月	「提言・実践首長会」発足	
	12 月	第 10 回全国水環境交流会（東京都）	
2003		日本ぐるっと一周・海交流（2 年目）	イラク戦争
	2 月	提言・実践首長会「合併部会」が提言書	自由党が民主党に合流
	4 月	提言・実践首長会「医療福祉部会」「教育部会」が提言書	
	8 月	第 4 回「まちの駅連絡協議会」総会＆フォーラムを開催（町田市）	
	10 月	提言・実践首長会「行政改革・公会計部会」が提言書を提出	
2004		日本ぐるっと一周・海交流（3 年目）	新潟中越地震
	2 月	第 5 回「まちの駅」フォーラム in 長岡を開催（新潟県長岡市）	
	2 月	提言・実践首長会「農業・農村部会」が提言書を提出	
	5 月	第 9 回全国首長連携交流会（栃木県宇都宮市）	
	7 月	『国の常識は地方の非常識』（PHP 研究所）を出版	
	8 月	第 8 回 全国 E ボート交流大会（茨城県千代川村：鬼怒川）	
	10 月	第 6 回「まちの駅連絡協議会」総会・勉強会（宇都宮市）	
2005	5 月	第 10 回全国首長連携交流会（愛知県長久手町）	郵政民営化選挙
	7 月	提言・実践首長会「教育部会」が「教育改革提言」を提出	愛・地球博
	9 月	第 4 回お台場 E ボート防災交流大会 ※全国大会を兼ねて	
	10 月	第 7 回「まちの駅」全国大会 in 見附を開催（新潟県見附市）	
2006	2 月	第 8 回「まちの駅」全国大会 in 甘木朝倉を開催（甘木市）	日本郵政株式会社発足
	5 月	第 11 回全国首長連携交流会（政策研究大学院大学） ※以後、毎年政策研究大学院大学で開催することとなる。	

年	月	事がら	日本・世界の動き
	9 月	第 9 回「まちの駅」全国大会 in 会津を開催(会津若松市)	
	10 月	地域交流センター30 周年記念交流会	
2007	4 月		能登半島地震
	5 月	『元気な子どもに育てる』(地域交流出版)を出版	新潟中越沖地震
	5 月	第 12 回全国首長連携交流会(東京都)	世界金融危機
	9 月	第 6 回お台場 E ボート防災交流大会　※全国大会を兼ねて	
	10 月	第 10 回「まちの駅」全国大会 in 上野(東京都台東区)	
2008	2 月	木曽川「川の駅」実証実験(各務原市、笠松町、犬山市)	北京五輪
	5 月	第 13 回全国首長連携交流会(東京都)	観光庁発足
	9 月	第 7 回 お台場 E ボート防災交流大会(港区)	
	10 月	第 11 回「まちの駅」全国大会 in 富士(静岡県富士市)	
	11 月	江戸川カッパ市実証事業(境町、春日部市、松戸市、江戸川区)	
2009	3 月	利根川・江戸川「川の駅」実証実験	オバマ大統領就任
	9 月	第 8 回 お台場 E ボート防災交流大会(港区)	
	11 月	第 12 回「まちの駅」全国大会 in かぬま(栃木県鹿沼市)	
	11 月	江戸川カッパ市実証事業(春日部市、流山市、松戸市、江戸川区)	
	12 月	「広域共助」プロジェクトがスタート	
2010	1 月	萩市の親戚の家で脳出血を発症、入院する	
	11 月	東京都足立区の泉記念病院に転院	尖閣列島問題浮上
2011	2 月	東京都足立区の桜会病院に転院	東京スカイツリー完成
2012			
2013			
2014	6 月	全国「道の駅」連絡会から、田中宛てにお礼の手紙をもらう	消費税 8%
2015			マイナンバー制度制定
2016			熊本地震
2017			
2018			
2019	2 月	東京都足立区の桜会病院で亡くなる(24 日、享年 75)	
	3 月	家族葬で荼毘に付される	

在りし日の田中栄治さん

田中栄治を語り合う会の様子